

知の旅立ち

教養セミナー学生論集

NO.30

2026



愛知学院大学教養部

知の旅立ち

教養セミナー学生論集 NO.30

2026

愛知学院大学教養部

表紙
久馬
栄道

知の旅立ち 第三〇号 目次

※各文章の後に掲載されている寸評は、各セミナー担当者によるものです。

教養セミナー学生論集

《教養セミナーⅠ・Ⅱ》

◇文学部

安倍晴明はなぜ最強の

陰陽師と言われるのか

— 霊力・政治的強さの源を探る —

半坂 茅 優……………3

キユーバ野球と亡命問題

— スポーツに見る国際政治 —

石垣 涼 介……………6

エスカレーター上での

歩行禁止と正しい乗り方

白井 優 羽……………9

オノマトペの特異性

— オノマトペは本当に言語といえるのか —

蒲原 弓 詩……………12

「ボラントピア」の語義の

問題点と対案

青野 小 春……………15

「友達」という語の

語義の問題点とその対案

上田 ひめの……………18

「化粧」についての語義の

問題点と対策

後藤 和暖実……………20

◇経営学部

『ファウスト』(第一部・第二部)

を讀んで

森島 虎多朗……………23

モード・ジャズ誕生の

理由と意義

伊原 寛 司……………25

信用金庫がこの先も

存続するために

— 経営課題から考える今後の展望 —

小林 涼 華……………29

ビブリオバトル

なぜ私たちは甲子園に

熱狂するのか

豊田 唯 依……………34

日本の宗教観がアニメへ

もたらす影響

宮本 実 結……………36

◇法学部

サンタクロースと犯罪

筒井 由 奈……………39

カプセルトイの魅力と広がり

野村 有 加……………43

◇商学部

推薦したいもの

木村 萌々夏……………45

加藤 諒 平……………48

「伝える力 伝わる力」 小野寺 咲星……………50

「伝える力 伝わる力」 鈴木 悠……………52

—SNSで正確な意思疎通はできるのか—

急増したクマの死骸の 兼松 楓夏……………55

処理について

◇心理学部

『ファウスト』(第一部・第二部)

を読んで 中 嶋 和 香……………59

『ファウスト』(第一部・第二部)

を読んで 寺 田 悠 乃……………61

◇経済学部

柳原通商店街の活性化 河 口 祥 太……………63

柳原通商店街の現状、取り組み、

活性化について 和 田 倅 奈……………67

*

令和七年度 教養セミナー・テーマ一覧

*

表紙絵の思い出

—横浜赤レンガ倉庫—

教養部数学教室 久馬 栄道

編集後記

《教養セミナーⅠ・Ⅱ》

安倍晴明はなぜ最強の

陰陽師と言われるのか

— 霊力・政治的強さの源を探る —

半 坂 茅 優

(宗教学化学科一年)

はじめに

安倍晴明は平安時代に活躍した陰陽師だ。彼には様々な伝説や逸話が残っている。その陰陽師としての能力の高さは現代まで伝わっており、近年ではアニメや漫画で最強キャラクターとして登場することも多い。

ここでは、安倍晴明の霊力、政治的影響力の側面からその能力の高さの根源に注目し、なぜ最強の陰陽師と称されているのかを考察する。

安倍晴明の出生と才能の根源

安倍晴明の陰陽師としての才能の根源には血筋が大きく

関係している。その出生については「葛の葉伝説」の中で語られており、父が人間、母が白狐であるという説が有名である。

葛の葉伝説では、摂津国阿部野の里に住んでいた阿倍保名は信太大明神に参拝する途中で怪我をした白狐を助ける。その後、白狐は逃げてしまうが、若い娘の姿に化けて「葛葉」と名乗り保名の前に姿を現し、やがて二人の間に子供が産まれる。その生まれた子供が安倍晴明である。

古来より、狐は稲荷神の使いといわれている。特に、白狐は神聖な存在であり、知恵や霊的な力を持つとされている。葛の葉伝説の冒頭でも白狐は信太大明神にいたことや、人に化ける能力があったことから、晴明の母である白狐は神に近い存在で、卓越した霊的な力を持っており、晴明はその霊的能力や強さを受け継いだと考えられる。

逸話から見る晴明の能力の高さ

安倍晴明にはさまざまな逸話が残っており、そこから晴明の陰陽師としての能力の高さが伺える。例えば、「賀茂忠行を鬼から救った」という話だ。晴明がまだ、陰陽道を学んでいた頃。師である賀茂忠行のお供をして出かけた際、鬼が近づいてくるのに気づき晴明自ら術を使って身を

隠したことで命拾いをした。このとき、忠行は晴明の才能に惚れこみ、自分の術の全てを教えようと決意したという話がある。また、一条天皇が病に臥せった際、禊を行いつつ復させたという話もあり、皇族からの信頼の厚さがうかがえる。

このほかにも晴明が天狗を封じた話や的中率の高い占術についてなど晴明の有能さがわかる逸話が多く残っており、これらの話から皇族や貴族からも認められていた晴明の陰陽師としての能力の高さがわかる。

式神と十二神将に見る晴明の靈力

式神とは、「陰陽師の命令で動く鬼神きじんまたは靈的な存在」のことを指す。式神にも種類があり、「陰陽師の思念が込められたことにより創られる式神（思業式神）」、「人形型をした「式札しきふだ」と呼ばれる和紙札、草や藁で作られた人形、通称「藁人形」に靈力が込められ創られた式神（擬人式神）」、「過去に悪事を行った靈などを倒し、服従させることで使えるようになる式神（悪行罰示神）」の三種類に分けられる。安倍晴明は式神を操るのが特に上手いと言われており、数多くの式神を使役していたと言われている。

そんな晴明が使役していた中で一番強いといわれるのが十二神将だ。この十二神将は悪行罰示神に分類される式神である。仏教にも薬師如来の下に属する十二神将が存在す

るが、晴明が使役していたのは、中国の占いで使用する神獸・靈獸である。この中には、日本の遺跡などでも見かける東西南北を守る神である四神（青龍、朱雀、白虎、玄武）も含まれている。晴明はこれらの式神と良好な関係を築いており、式神に家事を行わせていたといわれている。

使役している式神の数や強さは陰陽師の能力に大きく関係しており、力の強い陰陽師ほど強力な式神を使役することができる。そのため、十二神将のような強力な式神を使役し、良好な関係を築いていた晴明は、とても能力が高い陰陽師だったといえる。

晴明の政治的影響力

平安時代での貴族たちは、毎朝自分自身でその日の運勢を占ったり、重要な行事の日取りや入浴をする日まで陰陽師に占わせていた。このように平安時代では占いがとても重要視されていたため、天文観測や占いを専門とする陰陽師達は皇族や貴族に重宝されていた。

晴明は、青年時代に陰陽道だけでなく天文道も学んだと言われている。その後には、当時の国家機関のひとつである陰陽寮に所属し、役人として働いていた。晴明は当初、花山天皇に信頼され重用されていたが、花山天皇の退位後の晩年には当時の権力者である藤原道長の信任を得ていた。藤原実資が書いた『小右記』では、花山天皇への讓位の日時を選んだことや、道長自身の日記『御堂関白記』で

は道長の娘、彰子の立後の日時を清明が選んだことが記されている。

このように、古いを通して国の重要な意思決定にも関わっていて、清明の政治的影響力は他の陰陽師と比べても大きかったことが分かる。

おわりに

ここまで安倍清明の霊力と政治的影響力の強さの理由についてみてきた。阿部清明の生まれながらにして強力な霊的な力を持っていたと考えられる伝説、数々の逸話や使役していた式神、そして貴族社会で果たしていた重要な役割などが、清明の卓越していた陰陽師としての能力を示している。これらの伝承や記録が、安倍清明を「最強の陰陽師」と称する理由なのだ。

参考文献

- ・ <https://www.touken-world.jp/history/history-important-word/abeno-seimei/>「平安時代の重要用語安倍清明」(二〇一五年七月一六日確認)
- ・ <https://www.city.osaka-izumi.lg.jp/material/files/group/10/kohozumil1-07.pdf>「千年語り継がれる葛の葉伝説」(二〇一五年七月一六日確認)
- ・ <https://xn--ujju32nb2az79btea.asia/divine-beast/byakko.html>「稲荷神の使いとよめる白いキツネ『白狐』」(二〇一五年七月一六日確認)

- ・ <https://yumehajima-fair.jp/archives/104>「安倍清明と妖怪伝説・陰陽師が解き明かす禁断の霊力」(二〇一五年七月一六日確認)

- ・ https://www.seimeijin.jp/anecdotal_story/「阿部清明公逸話集」(二〇一五年七月一六日確認)

- ・ <https://hegate12.com/jp/article/388#:-:text=%E9%81%8E%E5%8E%BB%E3%81%AB%E6%82%A%E4%B%A%6B%E3%82%92%E8%A1%8C%E3%81%A3,%E3%681%9F%6E3%81%6A%E4%B%9D%E8%AA%AC%E3%81%8C%E6%AE%8B%E3%62%8B%E3%81%BB%E3%81%A9%E3%80%82>【簡単解説】陰陽師は何者？安倍清明はどんな人物、能力・術式・式神について(二〇一五年七月一五日確認)

- ・ <https://seiai.jp/hobby/1163780#03> 平安時代の陰陽師・安倍清明の生涯―並外れた占いの才能を持ち、常人にはない力で畏怖された陰陽師【日本史人物伝】(二〇一五年七月二五日確認)

- ・ <https://www.keg.ac.jp/keg/sakka/monogatari/tenpei/seimei.pdf>「天文博士安倍清明は見た！―藤原氏繁栄の陰役者？」(二〇一五年七月一六日確認)

- ・ <https://www.nippon.com/ja/japan-topics/g02411/>「陰陽師・安倍清明：神秘のツールで脚色された謎多き異能者」(二〇一五年一二月一六日確認)

- ・ <https://enchado.jp/column/%E5%B9%B3%E5%AE%89%E6%99%82%E4%BB%A3%E3%81%AE%E5%8D%A0%E3%61%84%E3%81%A8%E9%99%B0%E9%99%BD%E5%B8%AB/>「平安時代の占いと陰陽師」(二〇一五年七月一六日確認)

〈寸評〉

担当教員：河合 泰弘
安倍清明は、漫画や映画の題材にもなっており、名は

よく知られているものの、その人物像や陰陽師についてきちんとした知識を身につけている者は少ないだろう。半坂さんは、清明にかかわる様々な逸話や術を紹介し、陰陽師としての能力の高さを示してくれた。

教養セミナーの授業では、このレポートの内容を口頭発表してもらったが、そこではパワーポイントにて資料を表示して詳しく説明しており、聴いていた学生たちからも好評であった。このように物事を客観的にとらえ、他者の論考などを用いて丁寧の説明し様とする姿勢は、大いに評価ができる。これから飛躍が大いに期待できる。

キューバ野球と亡命問題

—スポーツに見る国際政治—

石垣 涼介

(歴史学科一年)

一、はじめに

キューバにおいて野球は、単なるスポーツの域を超え、国民文化であり国家の誇りでもある。カストロによる一九五九年の革命以降、野球は社会主義体制の「成功の象徴」として位置づけられ、政府主導で発展を遂げてきた。^[1] 国際大会におけるキューバ代表の活躍は国家の威信を高める手段として利用され、同時に「資本主義社会に頼らずとも一流選手を育成できる」ことの証とされた。

しかし、一九九〇年代以降、キューバリーグで活躍する多くのトップ選手たちがアメリカのメジャーリーグ(MLB)を目指して「亡命」という手段を選ぶようになった。国家を代表して活躍する選手たちが国を離れ、異国で自由・成功を求めるこの現象は、スポーツの問題にとどまらず、キューバの政治・社会の不安定さを露骨に表しているのではないかと考える。

本稿では、この「野球亡命」という現象を通して、キューバの政治体制の構造的な問題を読み解くことを目的

とする。なぜ選手たちは亡命を選ぶのか、国家はなぜスポーツにここまで介入するのか。これらの問いを通してスポーツと政治が絡み合うキューバ社会の実態を考察していく。

二、キューバの政治体制の概要

一九五九年、カストロ率いる革命政権がバティスタ独裁政権を打倒し、キューバは社会主義国家として舵を切った。新政府は直ちに米国資本の国有化を断行し、旧来の経済構造を大きく転換させた。同時に、社会主義的体制が確立され、現代に至るまでキューバの根幹を成している。

キューバは名目上共和国だが、実質的にはキューバ共産党（PCC）が唯一の合法政党として国家権力を独占している³。選挙制度は存在するが、候補者は事前に選別され、政治的多様性は厳しく制限されている。

このような体制下で、国家は国民生活を強く統制しており、教育・医療・スポーツなどの分野も国家が一元的に管理してきた⁴。この政治モデルのもとでは、アスリートも国家の「資産」つまり公務員として扱われることとなる。そのため、自由な国外移動の権利などは厳しく制限されることとなるのである。

三、野球と国家―スポーツの政治利用

革命以降、キューバ政府はスポーツ、とりわけ野球を政

治的プロパガンダの重要な手段として活用してきた。プロ野球制度は一九六一年に廃止され、国家によって組織・運営される野球リーグ「セリエ・ナシオナル」が新設された。これは、商業主義を廃し、社会主義的価値観に沿ったスポーツを体现する取り組みとされた。

キューバ政府は、国際大会での野球の勝利を社会主義体制の正当性・優位性の証明として用いた⁵。そのため選手たちは、個人の名声や報酬よりも、「革命正当性の体现者」としての側面を期待され、国際舞台に送り出されることになる。

こうした統制システムの裏側で、選手たちの自由なキャリア選択は制限され、海外でのプレー機会を求めて亡命する者が増加していくことになる。

四、亡命問題の実態と背景

一九九〇年代以降、多くのキューバ人野球選手がアメリカのMLBを目指して亡命するようになった。背景には、政治的抑圧など複合的な要因がある。「亡命」とされるこの行動は、国家への反逆とみなされる一方、国外では「夢の追求」として称賛されることも散見される。

キューバの憲法上、MLBでプレーするための合法的手段が存在せず、亡命という非合法的な手段を取らざるを得ない状況が生まれたのである。

亡命には政治的メッセージも含まれる。国の代表たる

トップ選手が国を離れることは、政治的プロパガンダにとって大きな打撃である。その一方で、二〇一三年の移民法改正以降、一部の亡命選手が再入国を許可されるなど、政策には微細な変化がみられる⁷⁾。

亡命は単なるスポーツ移籍ではなく、国家統制と個人の自由などが衝突する現象であり、亡命者の存在そのものがキューバの体制の構造的限界を映していると言えるだろう。

五、国際社会の関与と米国の影響

キューバ選手の亡命問題は、米国との政治関係に大きく左右されてきた。長年の国交断絶と経済制裁により、選手が正規ルートでMLBに移籍することはほぼ不可能であった。

二〇一八年にはMLBとキューバ野球連盟の間で合法移籍の合意がなされたが、米政府がこれを撤回し、再び亡命が唯一の手段となった⁸⁾。

六、おわりに

本稿では、キューバ野球と政治体制の交差点に位置する「亡命問題」に注目し、そこからキューバ社会の構造的な特徴を読み解いてきた。

キューバ政府は、革命後の社会主義体制の正当性を国内外に示すため、野球を国策として利用してきた。スポーツは「国家の象徴」として政治的に機能しており、選手たち

は体制のイデオロギーを体現する存在として扱われてきた。

しかし、亡命という現象はそうした構造への静かな反抗とも言える。経済的困窮、キャリアの制限などといった問題に直面した選手たちは、自らの意思で国外へと旅立った。これは体制の硬直性を象徴しているのではないだろう

か。

野球亡命問題は、スポーツ・政治・経済・人権が複雑に絡み合う交差点であり、キューバという国家の姿を映していると考えられる。亡命者たちの行動は、今なお続く体制の限界を問い直す重要な問いを我々に投げかけているのではないだろうか。

註

- (一) Slack, T. (1982). Cuba's political involvement in sport since the socialist revolution. *Journal of Sport & Social Issues*, 6 (2), 35-45.
- (二) Moreira Seijos, O. J. (2014). Changes in Cuba's migration policy and its impact on baseball. *Journal of Arts and Humanities*, 3 (11), 1-8.
- (三) 早稲田大学法学術院 国際法センター(二〇一四)「キューバ共和国憲法(一九七六年) p.6 第五条
- (四) 早稲田大学法学術院 国際法センター(二〇一四)「キューバ共和国憲法(一九七六年) p.6 第十五条
- (五) Doherty, K. T. (2012). The cause of baseball: Baseball and nation-building in revolutionary Cuba. *MNE: A Journal of Baseball History and Culture*, 21 (2), 53-68.

(6) 早稲田大学法文学術院国際法センター(二〇一四)、キューバ共和国憲法(一九七六年) p.12第三十二条

(7) サンスポ、(二〇二四年九月一二日)、「【MLB】Wソックスのモンカダがプレミア12のキューバ代表予備リスト入り 侍ジャパンとの対戦も」 <https://www.sanspo.com/article/20240912-NDDOOVUXZWRKKPKW3XJZAWMLYAU/>

(8) 「MLBとキューバ野球連盟との協定、トランプ政権が却下」 朝日新聞 GLOBE+(ロイター通信)、二〇一九年四月九日 <https://globe.asahi.com/article/12280144>.

〈寸評〉

担当教員・河合 泰弘

毎年、私の教養セミナーでは、学生自身が関心を持っていることからテーマを選び、レポートに仕立て、それをもとに口頭発表することを課している。これまで野球をテーマにする学生は数多くいたが、それらは特定の選手やチームについて、その魅力を論じることがほとんどであった。石垣さんのレポートは、それらとは一線を画すもので、キューバ野球の歴史と現状を政治体制と絡めて論じてくれた。特に選手のアメリカへの亡命問題をクローズアップして、キューバ社会の構造的な特徴を非常にわかりやすく論じてくれた。授業時のプレゼンにおいても、私だけでなく学生にも好評であった。論理的に丁寧に説明できており、このような彼の学びへの態度は大いに評価ができる。これからの飛躍が大いに期待できる。

エスカレーター上での

歩行禁止と正しい乗り方

白井 優羽

(歴史学科一年)

エスカレーターでは人々が安全かつ快適に利用できるように、いくつかの禁止事項と指示を提示している。その中で、とりわけ歩行禁止について問題となることが多い。エスカレーター上での歩行は、転倒や挟まれなどの事故の原因となる。埼玉県では二〇二一年に歩行せず立ち止まってしまう利用を義務付ける条例が施行されている。その後、愛知県名古屋でも二〇二三年に同様の条例が施行された。しかし、そのどちらも定着とまではいかないままである。人々はどうしてエスカレーター上を歩行するのだろうか。本稿では、エスカレーター上の歩行の禁止とその対策について検討する。

まずはエスカレーターの歩行の危険性について考えてい。エスカレーターは、ステップ上に立ち止まって利用することを前提に設計されている。そのため階段に比べて、ステップの高さが高くつまずいたり、横幅が狭く人とすれ違う時にぶつかったりしてしまい、事故につながる危険性がある。さらに歩行した当人以外の第三者を事故に巻き込

んでしまう可能性もある。実際に、エスカレーターにおける事故の原因の中で最も高い割合を占めるのは、歩行を含む乗り方不良だ。つまり、正しい乗り方をするだけでも事故のリスクを抑えることにつながるというえるだろう。

エスカレーター上での歩行が行われる要因として片側を空けて乗る「片側空け」が挙げられる。片側が空いていることで、歩行して駆け上がりやすい環境が出来上がってしまった。加えて片側空けは両側に立つ場合よりも乗ることができ人数が減り、特に混雑する場において輸送効率が落ちる。にもかかわらず、片側開けが行われているのは、片側空けをマナーとする価値観が関係している。初めて片側空けが始まったのは、ロンドンの地下鉄である。きっかけは明確になっていないが、一九四四年ごろ混雑緩和のために公務員が思いついたという説が挙げられている。実際にその頃の駅には片側空けを奨励するポスターが貼られていた。そして日本においては、阪急鉄道による「急ぐ人のために片側を空けましょう」という呼びかけがきっかけで始まった。この日本における片側空けの始まりについて斗鬼(二〇一五)に以下のような説明がある。

欧米式のエスカレーター片側空けが呼びかけられ、人々に受け入れられたことの背景にあったのは、単なる混雑、危険回避ではなく、国際化や、外国人の目を意識するという時代背景と、欧米式マナーこそ素晴らしい

しい、学ぶべきものとする価値観だったのではある。

このように、片側空けを欧米式のマナーと捉え、優れた欧米を見習い日本でも取り入れていかなければならないという意識が、片側空けが始まった背景に存在した。この時、日本が高度経済成長を遂げ世界第二位の経済大国になったり、その象徴ともいえる日本万国博覧会が開催されたりと、国際化を押し進めていく時代であったことがこの意識を強化した。以上の内容から、片側空けがマナーとして定着したことで、たとえ空いていてもその空いている側に乗って両側立ちはずらうという環境を作り上げたと考えられる。さらに多くの人が片側のみ乗る状況からは同調圧力が感じられ、集団意識の強い日本人は空いている側に立つのに抵抗感を感じやすい。けれども安全性や効率性、パリアフリーの観点で問題がある。特に手足に障がいを抱える人は、片側空け、片側空けを廃止し両側に立つ必要がある。そのための対策として、両側立ちの周知及び推奨の強化や、両側立ちを誘導するようなデザイン・人員の配置が考えられる。空いている側に立つハードルを下げ、抵抗感なく両側立ちできる環境づくりが求められる。

片側空けが急いでいる人が通るために行われたように、効率を重視する心理もエスカレーター上で歩行が行われる要因であろう。少しでも早く移動するために階段を登るようにエスカレーターを歩行するのである。一般社団法人日

本エレベーター協会の調査(二〇二五)によれば、約六〇%の人がエスカレーターを歩行してしまうと回答した一方で、約九〇%の人が歩行はやめた方がいいと回答している。このことから、エスカレーターの歩行に関して行動と思考との間に乖離が生じていることがわかる。また、元田・宇佐美(二〇一八)の調査によれば、停止と歩行の割合はほぼ半々で混雑時に歩行が増える。このことから、人々は停止して乗りたいが、時間に追われている時には立ち止まる余裕がなく歩行しているということが推測される。このようなエスカレーター上の歩行の対策として、エスカレーターだけでなく階段も設置することや歩行の危険性の周知が考えられる。

以上のように、エスカレーター上での歩行には片側空けという外部要因と早く移動したい心理という内部要因が関係している。そして歩行禁止を定着するためには、両側立ちを誘導する環境づくりや、歩行の危険性を浸透させ一人一人の意識を改革することが社会に求められる。

〈参考文献〉

- 「エスカレーター片側空けという異文化と日本人のアイデンティティ」(斗鬼正一、『江戸川大学紀要』第二五巻、pp. 33-50、二〇一五年)
- 「エスカレーター内の歩行に関する基礎研究」(元田良考・宇佐美誠史、『交通工学研究発表会論文集』三八、pp. 217-225、二〇一八年)

ホームページ

「エレベーターの日『安全利用キャンペーン』アンケート集計結果について」(二〇二四年度)、一般社団法人日本エレベーター協会、二〇二五年

〈寸評〉

担当教員・中村 綾

本稿は、近年エスカレーター上の歩行禁止が条例化しつつある中で、なかなか定着しない社会現象について分析を加えた論考である。

白井さんはこの問題を考えるにあたり、かつて第二次世界大戦中の欧米では「片側空け」がマナーであったこと、その後、高度経済成長期の日本で欧米に倣ったこのマナーが受け入れられたこと、そして、現代の歩行禁止を推奨する日本社会の考え方に変化していったことの歴史を丁寧に記述している。また、日本人の集団意識の強さを指摘したり、「エスカレーターを歩行することはやめた方がいいと思いつつ歩行してしまう」という行動と思考の乖離にも言及したり、心理面においても多方向に渡って文献を読み込んでいる。その上で、今後日本の社会においてエスカレーターでの歩行を禁止するためにはどうしたらよいか、自分の考えを結論に据えて締めくくっているのである。

レポートや論文を書く際に不可欠な多くの視点から客観的に物事を捉える姿勢と明確な説明が見事に備わった

レポートであると言えるであろう。

教養セミナーの授業では、授業全般を通して文章を書く練習を行ってきた。その中で繰り返し伝えてきたことは「初めて読む人が分かりやすいように丁寧に説明すること」と、レポートにはデータや資料を示すことで客観的な証拠を提示すること、他者の参考文献を引用する際には出典を明記することである。

白井さんのレポートは、複数の論文の要点をしっかりと把握し、非常に分かりやすく自分の言葉で説明した上で、結論で自分の考えを明確に述べることができていた。白井さんは教養セミナーの授業内課題でもいつも要点を捉えて上手に説明する成果物を提出しており、今回のレポートでもそれが十二分に発揮されていたことを大変嬉しく思う。これからもたくさんのお話を学んで自分の人生を実りあるものにさせてくれるよう願っている。

オノマトペの特異性

—オノマトペは本当に言語といえるのか—

蒲原弓詩

(日本文化学科一年)

オノマトペとは、擬音語・擬態語のことで、音や感覚を言語表現としてあらわした語のことを指す。オノマトペは、意味を詳しく知らなくてもなんとなくイメージがついたり、だれかに体系的に教えられなくても自然と身につけていたりする点で、他の言葉とは異なる特徴を多く持っている。そのため、オノマトペはしばしば「感覚的な言葉」「特殊な表現」とみなされ、「本当に言語といえるのか」という疑問が生じる。本レポートでは、このようなオノマトペの性質を整理し、オノマトペがことばとしてどのような位置づけにあるのかを検討していく。

日本語のオノマトペは、実際の音を模倣する擬音語だけでなく、状態・感情・動作様態を表す擬態語を多数含む点に特徴がある。例えば、「ぴかぴか」は光の様子を、「うろろ」は落ち着きなく動く様子を、「いらいら」は心理状態を表しており、必ずしも現実の音を直接写し取ったものではない。この点で、日本語のオノマトペは単なる「音のまね」ではなく、感覚や印象を表現する語彙として発達し

てきたと考えられる。

さらに、日本語のオノマトペには整然とした音象徴の体系が見られる。例えば、「ころころ」は小さく軽いものが転がる印象を与えるが、「ごろごろ」になると大きく重いものが転がる印象を持つ。また、「さらさら」はなめらかで軽い触感を連想させるのに対し、「ざらざら」は粗く不快な触感を想起させる。このような清音と濁音の対立による音象徴は、日本語全体や他言語にもある程度見られる現象ではあるが、日本語のオノマトペでは特にイメージと結びつきやすく、直感的な理解を促している点が特徴的である。

土屋、鈴木、任、渡部(二〇一二)は、日本語オノマトペを「印象や意味を体系的に担う語彙」と捉え、モーラ構造と意味印象の関係を統計的に分析している。その結果、オノマトペは偶発的な音の集まりではなく、意味推定が可能な語彙集合であることが示された。

これは、オノマトペが話者個人の感覚に依存した表現ではなく、社会的に共有された意味を持つことを示している。このように、日本語オノマトペは話者間で共通理解が成立する点で、言語的記号としての条件を満たしているといえる。

次に、言語の基本原理として「恣意性」が挙げられる。恣意性とは、言語の形式(音)と意味との間には必然性がないという原理である。例えば、日本語で「イヌ」と呼ば

れる動物は、英語では「ドッグ(dog)」、フランス語では「シヤン(chien)」と呼ばれている。オノマトペは音と意味の結びつきが直感的であるため、この原理に反するように見える。しかし、オノマトペは言語によって異なる。例えば、日本ではイヌの鳴き声を「ワンワン」、ニワトリの鳴き声を「コケコッコ」と表現するが、欧米では、イヌの鳴き声を「バウワウ(bow-wow)」、ニワトリの鳴き声を「クックドゥードゥルドゥー(cock-a-doodle-doo)」と表現する。

同じ音を聞いていても、言語によって表現が異なるのは、それぞれの言語の音韻体系や慣習に従って表現が作られているからである。このことから、オノマトペは自然音をそのまま写し取った普遍的な表現ではなく、各言語の中で選択・形成された語であるといえる。つまり、オノマトペも完全に非恣意的なものではなく、一定の恣意性を含んでいる。

また、言語といえるためには、語彙が体系として存在することが重要である。田嶋(二〇一六)では、日本語オノマトペの用法が「場面依存でありながら、無制限に自由ではない」ことが指摘されている。すなわち、オノマトペの使用には暗黙の制約と話者間で共有された知識が存在する。例えば、「ざらざら」は光る様子を表す語であり、基本的には光や輝きに関係する対象にしか用いられない。そのため、「ざらざら怒る」といった表現は一般的に不自然

だと感じられる。この不自然さを多くの話者が直感的に判断できるのは、オノマトペが日本語の語彙体系の中で一定の意味範囲と使用条件を持つているからである。

さらに、オノマトペは文法的にも日本語の中で重要な役割を果たしている。日本語では、オノマトペは副詞的に用いられることが多く、「雨がさあざあ降る」「心臓がどきどきする」のように、述語と結びついて文を構成する。また、「ぴかぴかの床」「ぐちゃぐちゃな部屋」のように名詞を修飾する形容詞的用法も見られる。これらは単なる感嘆や叫びではなく、文法構造の中に組み込まれた表現であり、文として自然に理解される。この点からも、オノマトペは言語体系の外にあるものではなく、文法的に運用可能な語であるといえる。

以上の考察を踏まえると、オノマトペは音や感覚を直接的に表すという点で一般語彙とは異なる性質を持つものの、意味が共有され、体系的に整理され、文法の中で機能する語であることが分かる。確かに、音象徴性が強く、直感的に理解しやすいという特殊性はあるが、それは言語でないことを意味するのではない。むしろ、オノマトペは言語を持つ多様な表現手段の一つであり、言語の可能性を広げる存在であると考えられる。したがって、「オノマトペは言語といえるか」という問いに対しては、「オノマトペは音象徴的性質を強く持ちながらも、語彙・体系・文法の点で言語の一部として十分に位置づけられる」と結論づけ

ることができる。

参考文献

- ・「モーラ系列と音象徴ベクトルによるオノマトペへの印象推定 法一(二〇一二) 土屋誠司、鈴木基之、任福継、渡部広一 (https://www.jstage.jst.go.jp/article/jinp/19/5/19_367/article-char/ja/)
- ・「オノマトペ(擬音語擬態語)について」(二〇一六) 田嶋香織 (<https://kansai-gaidai.repo.nii.ac.jp/records/5910>)
- ・「言語の本質 ことばはどう生まれ、進化したか」中公新書 (二〇二三) 今井むつみ、秋田喜美

〈寸評〉

担当教員・中村 綾

本稿はオノマトペについての考察を述べたレポートである。

我々は日常で日本語を使用する中で様々なオノマトペを用いていることは、おそらく多くの人が漠然と抱いている事象であろう。

けれども、蒲原さんはオノマトペが単に擬音語・擬態語として用いられる言語というだけではないことに着目し、状態や感情などを表すもの、清音や濁音などの音でイメージを抱かせるものなど様々な部類に分類されること、けれどもそこには話者間の共通理解や恣意性も含まれていること、さらに文法的にも運用可能で決して言語体系の外にあるものではないこと、など多くの特徴を系

統立てて明確に説明している。

これらは蒲原さんが多くの文献に目を通し、それらの要点を的確に把握して丁寧に説明したことで出された成果なのである。

教養セミナリーの授業では、授業全般を通して文章を書く練習を行ってきた。その中で繰り返し伝えてきたことは「初めて読む人が分かりやすいように丁寧に説明すること」と、レポートにはデータや資料を示すことで客観的な証拠を提示すること、他者の参考文献を引用する際には出典を明記することである。私が授業で伝えたことを蒲原さんがしつかりと汲み取って、このレポートに生かしてくれたことを大変嬉しく思う。

蒲原さんは授業内で課された課題もいつも丁寧に仕上げて提出してくれた。この姿勢を常に大事にし、蒲原さんらしさを大切にしてこれからの人生を豊かなものにしていくってほしいと思う。

「ボランティア」の語義の

問題点と対案

青野 小春

(日本文化学科一年)

「ボランティア」という語には、「ボランティアとして清掃活動を行う」という文で用いられるような語義が存在する。本稿では、この語義に関する、複数の国語辞典の語義の問題点を指摘し、かつ、対案を示す。

まず、『新明解国語辞典』では、「ボランティア」の語義として、「自由意志をもって社会事業・災害時の救援などのために無報酬で働く人(こと)」。という語釈を示している。また、この語義において用いられる例として、「ボランティア活動」を挙げている。

さて、この語釈には問題点が一つ存在する。それは、「ボランティアに当てはまる範囲を「無報酬で働く人(こと)」に限定している点である。確かに、ボランティア活動の多くは無報酬で行われる。しかし、募集団体が参加者に少額の報酬を支給する有償ボランティアも存在する。「無報酬で働く人」に当てはまらない有償ボランティアは、「ボランティアではなく、アルバイトに分類されるのだろうか。ボランティアを「無報酬で働く人」、アルバイトを「有償で働く

人」と定義することはできないと考える。なぜなら、「ボランティア」と「アルバイト」、この二つの語の違いは報酬の有無ではなく、その目的性にあるからだ。『新明解国語辞典』では「アルバイト」の語義は「収入を得るためにする、本務以外の仕事」という語釈で示されている。つまり、「アルバイト」は収入を得ることを目的としている。一方で、「ボランティア」は自由意志をもって活動することを目的としており、結果として報酬を受け取ったとしても、それは目的ではない。この目的性の違いに着目することで、有償ボランティアもボランティアの一種であると言える。このことから、「無報酬で働く人(こと)」という限定的な表現を改め、ボランティアは報酬の有無を度外視した活動、またはそれを行う人であることを記す必要がある。

次に『デジタル大辞泉』では、「ボランティア」の語義として、「自主的に社会事業などに参加し、無償の奉仕活動をする人」という語釈を示している。また、この語義において用いられる例文として、「ボランティアで日本語を教える」、「ボランティア精神」を挙げている。

この語釈には二つの問題点が存在する。一点目は、「無償」に限定している点である。これは『新明解国語辞典』の語釈の問題点と同一である。

二点目は、「奉仕活動」という箇所である。「奉仕」の語義は『新明解国語辞典』の中で「自分にとつての利害や名誉を無視して国家・社会・人のために尽くすこと」という

語釈で示されている。しかし、ボランティアは必ずしも自分にとつての利害を無視し、他者に尽くす活動ではない。社会貢献以外のボランティアの目的として、新しい経験やスキルを獲得すること、新たな人間関係を築くことなどが挙げられる。これらは、自分の利益を目的とした動機であると言える。さらに、奉仕活動に積極的に取り組んだことを他者に評価してもらうためにボランティアに参加する場合もある。例えば、ボランティアに参加する様子をSNSで発信する配信者は、名譽を目的としてボランティア活動を行っていると言えるだろう。また、彼らはインプレッションにに応じて収益を得ていることもある。このような私利的な動機で行う活動は奉仕活動ではない。しかし、社会貢献を目的としていなくとも、自主的に参加し、活動を行った実態があれば、それはボランティアとして活動したと言えるだろう。このことから、「奉仕活動」は「ボランティア」を説明するには狭い表現であり、「奉仕」は「ボランティア」の一面にすぎないと考える。従って、「ボランティア」という語をより包括的に捉えるために、ボランティアには社会貢献以外の目的を持った活動も含まれることを記す必要がある。

最後に、まとめと今後の課題を示す。

本稿では、『新明解国語辞典』と『デジタル大辞泉』を取り上げ、「ボランティア」の語義の問題点を複数指摘した。これら全ての問題点を踏まえると、「ボランティア」

の当該の語義は「社会貢献や自己成長を目的として、自由意志をもって社会事業などに参加し、活動する人(こと)」。交通費や謝礼を受け取る場合もあるが、多くは無償」と記述するのが妥当ではないかと考えられる。

なお、本稿では、「ボランティア」の語義の対案における「自由意志」という意味特徴について、そこに公益性が期待されるのは何故かという点については論じることができなかつた。この点に関する詳細な検討は、今後の課題としたい。

参考文献

『新明解国語辞典』第八版、三省堂
『デジタル大辞泉』第二版、小学館 (<https://japanknowledge.com/contents/dajisen/>)

〈寸評〉

担当教員・野田 大志
本セミナーでは、一年間を通して諸々のアカデミックスキルを提示すると共に、「適切で効果的な日本語コミュニケーションを目指そう!」というテーマの下、日常的な言語使用を多角的に捉え、批判的に検討する様々なタスクを扱った。春学期の最終レポートでは、その一環として、任意の単語を選び、国語辞典におけるその語釈の問題点を指摘し、対案を提示してもらった。

さて、青野さんは一年間の教養セミナーⅡへの取

り組み方と同様、考察対象語が有する様々な意味特徴について冷静かつ堅実に、そして深く考察し、その結果を丁寧言語化することができた。

考察においてはまず、従来の語釈において断定されている〈無償〉という意味特徴について、実際には〈有償〉であっても「ボランティア」といえるケースがあることを、関連語である「アルバイト」との比較を通して明らかにした。

次に、ボランティアを行う〈目的〉について、従来の語釈において言及されている〈奉仕活動〉以外の側面について明らかにした。

以上の分析により、青野さんは「ボランティア」という語の意味記述を深化させられた(＝適切なメタ言語の選定ができた)のはもちろんのこと、これを実現するために、ボランティアをめぐる現代社会の実態に十分に目を向けることもできた。いわば人文科学的な思考と、社会科学的思想を、適切な範囲で青野さんなりに融合し、その結果を過不足なく言語化することのできたレポートであったと評価できる。

このセミナーを通じて学んだ事柄をきっかけとして、青野さんが今後も、幅広い学問領域に積極的にアプローチしてくれること、そして、教養・専門の学びと並行して、日本の言語・文化・社会の多様な側面に意欲的に向き合ってくれることを、強く期待している。

「友達」という語の

語釈の問題点とその対案

上 田 ひめの

(日本文化学科一年)

「友達」という語には、「私は明日、友達と海に行く」という文で用いられるような語義が存在する。本稿では、この語義に関する、複数の国語辞典の語釈の問題点を指摘し、かつ、対案を示す。

まず、『デジタル大辞泉』では、「友達」の語義として、「互いに心を許しあって、対等に交わっている人。一緒に遊んだりしゃべったりする親しい人。友人。朋友。友」という語釈を示している。また、この語義において用いられる例文として、「友達になる」、「遊び友達」、「飲み友達」を挙げている。さて、この語釈には、二つの問題点が存在する。一点目として、恋人や家族との違いがこの語釈だけでは明確になっていないことが挙げられる。同辞書内で、「恋人」、「家族」を調べてみたところ、「恋しく思う相手。普通、相思相愛の間柄にいう」、「夫婦とその血縁関係者を中心に構成され、共同生活の単位となる集団。近代家族では、夫婦とその未婚の子からなる核家族が一般的形態」と示されていた。これらの語釈は「友達」の説明としては適

していないが、「友達」の語釈はこれらの語の説明にも当てはめることができると考えられる。そこで、「恋人」との違いは、恋愛感情の有無やスキップの有無で、「家族」との違いは、血縁関係の有無で説明ができると考えた。このことから、「友達」という語の語釈として、このように他の語と明確に違いを示す言葉を説明の中に入れるべきだと考える。二点目は、「互いに心を許しあって」という条件に限定してしまっている点である。この語釈では「友達」と定義づけるにあたって、個人の認識だけでなく、双方の認識が合致しなければならぬことになる。だが、誰を友達と認識するかは個人の認識でしかなく、他者と言葉を用いて明確にするものではない。このことから、「互いに」という限定的な表現は避けるべきであると考え

る。次に、『明鏡国語辞典』では、「友達」の語義として、「親しくつきあっている人。友人。友」という語釈を示している。また、この語義において用いられる例文として、「遊び友達」、「飲み友達」を挙げている。さて、この語釈にも、二つの問題点が存在する。一点目は、先述したように、恋人や家族との違いが明確でないという点である。これについては、既に指摘した方法を用いることで解消できるだろう。二点目は、上司と部下や生徒と先生などといった関係性にもこの語釈が該当してしまうという点である。「友達」という関係性に年齢は関係ないが、職務上や制度

上、上下関係にある間柄に「友達」という名称は適していない。この問題は『デジタル大辞泉』の語釈に用いられている、上下・優劣といった差がないことをあらわす「対等」という語を用いることで解決できるだろう。

最後に、まとめと今後の課題を示す。

本稿では、『デジタル大辞泉』と『明鏡国語辞典』を取り上げ、「友達」の語義の問題点を複数指摘した。これら全ての問題点を踏まえると、「友達」の当該の語義は、(へ血の繋がりがや婚姻関係、恋愛感情を持たず、対等に一緒に遊んだりしゃべったりする親しい人。また、通常恋人間のみで行われるスキンシップは、前述した関係の者同士ではないものとする)と記述するのが妥当ではないかと考えられる。

なお、本稿では、「友達」と定義づけるのに必要な親しさの程度をどのように記述すべきかについては論じることができなかった。この点に関する詳細な検討は、今後の課題としたい。

参考文献

『デジタル大辞泉』第二版、小学館
『明鏡国語辞典』第二版、大修館書店

〈寸評〉

担当教員…野田 大志
本セミナーでは、一年間を通して諸々のアカデミック

スキルを提示すると共に、「適切で効果的な日本語コミュニケーションを目指そう！」というテーマの下、日常的な言語使用を多角的に捉え、批判的に検討する様々なタスクを扱った。春学期の最終レポートでは、その一環として、任意の単語を選び、国語辞典におけるその単語の語釈の問題点を指摘し、対案を提示してもらった。

さて、上田さんは一年間を通して、授業内で扱いたいだけのトピックに対しても、極めて能動的に、また誠実に向き合っていたことが印象的だった。また他者に対して、自身の思いを丁寧な言葉で伝えられることも印象的だった。レポートも、そのような姿勢、意識が十分に反映されたものとなった。

特に評価できる点は、以下の二点である。

一点目は、関連語の意味特徴との適切な比較である。考察において、当人と「恋人」との関係、当人と「家族」との関係、「上司」と「部下」の関係、「生徒」と「先生」との関係という大きく四つの関係に目を向け、それらの関係と「友達」(同土)との関係との共通点と相違点を、適切なメタ言語(＝ある言語表現の意味の記述に用いる言語表現)によって明示することができた。

二点目は、「友達」であると判断する基準についての検討である。従来の語釈では、〈双方の認識〉がその基準として明示されているのに対し、実際に「友達」であると判断する基準はあくまで〈当人の認識〉であり、

〈相互性〉は不可欠な要素ではないという鋭い指摘をすることができた。

全体として、「友達」の語釈を精緻化するための多角的なアプローチができており、その思考がきちんと整理されていることも文章から伝わってきた。

今後、教養セミナー・IIでの学びを基盤として、そして上田さんの長所を十分に生かして、大学生活において、自己や他者が使用する言葉に丁寧かつ真摯に向き合うという営みを絶えず続けてくれることを願っている。

「化粧」についての語釈の

問題点と対策

後 藤 和暖実

(宗教学文化科一年)

「化粧」という語には、「化粧をする」という文で用いられるような語義が存在する。本稿では、この語義に関する、複数の国語辞典の問題点を指摘し、かつ、対案を示す。

まず、『デジタル大辞泉』では、「化粧」の語義一として、「紅やおしろいなどを使って、顔を美しく見えるようにすること。つくり。けそう」という語釈を示している。また、この語義において用いられる例文として、「念入りに化粧する」を挙げている。

さて、この語釈には、問題点が二つ存在する。一点目は、「顔」という身体の一部に限定してしまっている点である。確かに、化粧は顔に施すものだという印象が強い。しかし、それは多くの人々が主に施している部分として定着しているだけであり、化粧は顔以外の部分に施すこともある。例えば、「首」である。自身の肌の色より、少し明るいトーンのファンデーションを顔に塗った場合、顔と首で色の境目ができてしまう。そのため、ファンデー

シヨンは顔から首にかけて塗り、違和感のないように馴染ませるのだ。また、「鎖骨」にも施すことがある。肌より暗い色のファンデーションを使って影をいれたり、ラメを使って艶を出したりする。これは、鎖骨に立体感を出し、目立たせるために施す化粧であると言えるだろう。他にも、傷跡や痣を隠すために、手足にファンデーションを塗る人も少なくない。このことから、化粧を施す部分を「顔」に限定してしまっている点が不適切であると考ええる。

二点目は、「美しく見えるように」という箇所についてである。化粧をする目的が、必ずしも美しく見せるためだけだとは言いつてもいい。なぜなら、「特殊メイク」というものが存在するからだ。Weblioに搭載されている『デジタル大辞泉』によると、特殊メイクとは「映画やテレビドラマなどで、俳優の顔や体に手を加えて、別の顔や体を作り上げる技術のこと。人工皮膚などを用いて歴史上の人物に似せたり、傷を負っているように見せたりする」と示されている。つまり、意図的に傷や痣、しわを作る化粧なのである。このように化粧は、単に美しく見せることが目的ではない。よって、化粧の目的を「美しく見えるように」と示している点を、より多様な目的に対応することのできる表現に変えるべきであると考ええる。

次に、『明鏡国語辞典』では、「化粧」の語義一として、「顔におしろい・紅などを塗って美しく見えるようにすること。また、その塗ったもの」という語釈を示している。

また、この語義において用いられる語例として「化粧品」を挙げている。

この語釈には、問題点が三つ存在する。一点目は、「顔」、二点目は、「美しく見えるように」という箇所である。これらは先に述べた『デジタル大辞泉』の問題点と同様であるため、それを示すことで問題の指摘とする。

三点目は、「塗って」という表現がされている点についてである。化粧を施す際、使う化粧品は塗るものばかりではないはずだ。ファンデーションや口紅を「塗る」と表現することは間違いではないが、「アイラインを塗る」とは言わない。「アイラインを引く」という表現が適切だろう。また、「つけまつげを付ける」とは言うが、「つけまつげを塗る」とは言わない。したがって、「塗って」という表現を用いるのは不適切であると考ええる。

最後に、まとめと今後の課題を示す。

本稿では、『デジタル大辞泉』と『明鏡国語辞典』を取り上げ、「化粧」の語義の問題点を複数指摘した。これら全ての問題点を踏まえると、「化粧」の当該の語義は、〈紅やおしろいを使って、肌や身体の一部を、理想とする外見に見えるようにすること〉と記述するのが妥当ではないかと考えられる。

なお、本稿では、心理的变化を目的とする化粧についてと、二つの辞書に共通して用いられている「紅」「おしろい」の語義については論じることができなかった。これら

の点に関する詳細な検討は、今後の課題としたい。

参考文献

『デジタル大辞泉』、小学館

『明鏡国語辞典』第二版、大修館書店

Weblio 辞書 <https://www.weblio.jp/>

〈寸評〉

担当教員・野田 大志

本セミナーでは、一年間を通して諸々のアカデミックスキルを提示すると共に、「適切で効果的な日本語コミュニケーションを目指そう！」というテーマの下、日常的な言語使用を多角的に捉え、批判的に検討する様々なタスクを扱った。春学期の最終レポートでは、その一環として、任意の単語を選び、国語辞典におけるその単語の語釈の問題点を指摘し、対案を提示してもらった。さて、後藤さんは今回のレポートにおいて、一年間の教養セミナー・IIへの取り組み方と同様、対象語の意味について丁寧かつ堅実に考察し、その結果を丁寧に言語化することができた。

特に評価できる点は、次の二点である。

一点目は、現行の辞書の語釈の不足を、限なく指摘できている点である。大きく、「化粧」の〈対象範囲〉、〈目的〉、〈様態〉の三点について、「化粧」という語の背景に広がる百科事典的知識、すなわち〈化粧〉をめぐる

社会・文化的背景に十分に目を向け、その多様性を正確に指摘することができた。

二点目は、考察対象語との適切な向き合い方である。後藤さんは、幼い頃から高校生までダンスを習っていた経験があり、舞台に立つ機会が多くあったそうである。その中で、踊る舞台やダンスのコンセプトに合わせて、様々なメイクを施したり、他者のメイクを見たりしたことで、〈化粧〉の効果や幅広さを知り、興味が高まったそうである。このことが、本レポートにおける考察対象語を選定する大きな理由となっている。このような選定をした場合、往々にして、趣味の対象となる〈事柄〉そのものの（文化論的）考察に傾きがちである。しかし後藤さんは、あくまで客観的に〈単語〉としての「化粧」に向き合い、（本来のレポートのテーマである）日本語学の枠組みにおける〈意味〉の考察を行い、一定の成果を出すことができた。

後藤さんが今後も、このセミナーで学んだことを基盤として、幅広い学問領域に対して意欲的にアプローチし続けてくれること、そして、日本語運用能力にさらに磨きをかけてくれることを、強く願っている。

『ファウスト』(第一部・第二部)

を読んで

森 島 虎多朗

(経営学科一年)

『ファウスト』を第一部から第二部まで読み、印象的だったのは、ファウストが物語の進行とともに人間的に大きく変化していく点である。私はファウストの変化していく姿にとっても驚いた。第二部の最後でファウストが語った、海辺の土地を干拓したいという願いは、初期のファウストには考えられなかったからだ。

第一部におけるファウストの欲望はとても自己中心的で、他者を対等な存在として見る視点が欠けているように思えた。ファウストはグレートヒエン(マルガレーテ)を愛してはいたが、彼自身の人生の穴の空いた部分を埋めるために彼女を利用したのである。その結果として、彼女の人生が段々と壊されてしまつていったのだと思う。ここで重要なのは、ファウストが明確な悪意をもって彼女を不幸にしたわけではないという点だ。彼は自分の感情には誠実であったが、他者の人生や考えを想像する力が欠けていたと考えられる。ここで描かれたのは、真の悪人ではなく、未熟な人間が他者の人生を破壊する姿ではないだろうか。

第二部に入ると、ファウストの関心は自己中心的なものから、大きく外側へと広がつていった。個人的な快楽や感情ではなく、国家や土地開発といった社会的な視点が生まれてきた。この変化は彼自身の成長のようにも見える。しかし、私はむしろ、そこに危険性が潜んでいると感じた。なぜなら、行為の影響が大きくなればなるほど、個々の小さな犠牲が見えにくくなつたり、犠牲の重みが軽くなつていつたりすると思うからだ。

その象徴として、バウチスとピレモンの家をめぐる場面を挙げたい。老夫婦はファウストの計画に特に敵対していたわけでもなく、ただ昔から住み慣れた場所に生きていただけだった。それでも未来のためという名目のもと、ファウストがメフィストに立ち退かせるように命じたことで、最終的に家が焼かれるだけでなく、老夫婦も亡くなつてしまった。この場面を読んだとき、私は第一部のグレートヒエンと似ているように思った。グレートヒエンの人生が少しずつ壊されていったように、ファウストが望んでいなくとも老夫婦が亡くなつてしまったからだ。

ただしこの場面では、ファウスト自身が手を下したのではなく、彼の責任は間接化されている。ファウストは老夫婦の死を直接望んでいたわけではない。しかし、望まなかったからといって彼の責任が消えるわけではない。彼はより良い未来という抽象的な目的の中で、目の前の人間の存在を切り捨ててしまった。この構造は、近代社会が繰り返

返してきた問題そのものだと思う。理想や進歩はしばしば正しいものとして語られるが、その裏側で誰が犠牲になっているのかは語られにくい。それでもゲーテは、ファウストの行いを完全に否定してはいない。ファウストは満足して立ち止まることなく、最後まで何かを成し遂げようと挑戦し続けた。その姿勢自体が、ゲーテの描きたかった人間の本質だ。私はこの人間観に共感した。行為し続けることが常に正しいとは限らないが、確かにそのほうが人間らしいと思う。

言論などへの統制が存在したゲーテの時代を考えると、ファウストの姿には、身分や不平等に縛られない、自由な社会への希求が強く反映されているように思われる。また、個人の能力や行為によって世界を変えることができるという発想は、封建的な秩序に対する批判とも読むことができる。しかしゲーテは同時に、その理想が他者を押しつける力へと変わってしまう危険性も描き出している。

『ファウスト』全体を通して描かれるのは、理想像ではなく、過ちや悩みを抱えながらも前へ進み、何かを成し遂げようとする、現実の人間の姿である。最後に描かれたファウストの魂の救済は、過ちを犯さないことではなく、犯してしまった過ちを引き受けながらも、必死に生き続ける姿勢そのものの大切さを伝えているのではないだろうか。

私はこの作品を、人間の可能性を肯定すると同時に、一人の人間の影響力を軽視しがちな危うさを伝えている作品

だと思ふ。授業を通し、ひとつの行為が誰にどんな影響を与えるのかを想像することの重要性と私自身が何を求め、何をしたいのかを見つめ直す、良い刺激を得ることができた。この教養セミナーで得た知識や経験を、今後の学生生活に活かしていきたいと思ふ。

テキスト

ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ著『ファウスト』（第一部・第二部）、池内紀訳、集英社文庫、二〇〇四年。

〈寸評〉

担当教員…糸井川 修

この授業では一年をかけてドイツの文豪ゲーテの戯曲『ファウスト』を講読しています（春学期は第一部、秋学期は第二部）。そして学生の皆さんは、毎回授業の際に読み進んだ分の感想を提出し、学期末にそれをまとめたレポートを作成します。

ファウストの人間の成長に焦点を当てた森島君のレポートには、人間に対する幾つかの重要な洞察が含まれています。悪意はなくても未熟さや想像力の欠如から人を傷つけてしまう可能性、理想の追求の陰で見落とされがちな犠牲者の存在、社会の変革に対して一人の人間が持つ可能性など、森島君の挙げた気づきからは、豊かな想像力と冷静な思考で作品を読めたことがわかります。

学生の皆さんには、四年間に一冊でも多くの世界的名

作に触れ、そこから社会と人間を見る確かな目を培って
もらいたいと思います。

モード・ジャズ誕生の 理由と意義

伊原寛司

(経営学科一年)

一、はじめに

モード・ジャズとは、一九五〇年代末に登場したジャズのジャンルである。本稿では、その誕生の背景と、従来のジャズとの理論的・実践的な違いを明らかにする。特に、即興演奏における構造の転換に注目し、モード・ジャズの意義を考察する。

二、モード・ジャズ誕生以前のジャンル「ビバップ」

一九四〇年代に「ビバップ」と呼ばれるジャズのジャンルが登場した。これは少人数編成を基本とし、即興演奏を重視するスタイルである。一般的には、曲の冒頭と終わりにテーマメロディを演奏し、その間にテーマのコード進行に基づいてアドリブを行う形式がとられる。この形式は現代のモダン・ジャズにも受け継がれている。プレイヤーはコードに則って、対応するスケールやアルペジオを駆使してアドリブを行うため、単旋律だけでも背景のハーモニーを感じられるのが特徴である。

三、ビバップが抱える課題

ビバップのアドリブは、演奏技術を競うスポーツ的な側面を持ち、より複雑なコード進行を用いる傾向が強まった。しかし、発展を重ねる中で、メロディックなフレーズの創出が難しくなり、音選びの自由度も制限されていた。ビバップにおける基本的なフレーズ構築法は、コードトーンをダウンビートで捉えるようターゲットノートを設定し、それに向けてアプローチノートで接近するというものだ。また、複雑なコード進行に調和させるには、演奏者がコードトーンを意識することが不可欠であった。こうしてビバップは、高度な技術を要する難解な演奏へと偏り、即興性が形式化されていった。

四、複雑で難解なコード進行の代表例：『Giant Steps』

一九六〇年にジョン・コルトレーンが発表した『Giant Steps』は、そうした複雑さの極致ともいえる作品である。BPM約二九〇という速さに加え、コード進行には「コルトレーン・チェンジ」と呼ばれる技法が用いられており、マルチトニック・システムという特殊な構造を持つ。II-V-Iの進行を長三度で転調しながら一小節ごとに連結するもので、一秒足らずで転調が繰り返される。この曲は、ビバップの技巧的な極致であると同時に、その限界を露呈する存在ともいえる。

五、打開策としての革新的スタイル

ビバップの発展に伴い、コード進行に基づくアドリブに限界を感じるミュージシャンが増え、演奏が形式的でマンネリ化する傾向が指摘されるようになった。こうした状況の中で、コード進行から演奏者を解放し、より自由で開放的な即興を可能にする新たなアプローチとして、教会旋法（モード）を活用した「モード・ジャズ」が誕生した。モード・ジャズは、従来の「コードに基づく即興」から「旋法に基づく即興」へのパラダイムシフトである。ビバップでは、各コードに対し適合するスケールやアルペジオを「垂直的」に適用してフレーズを構築する必要があったのに対し、モード・ジャズでは、比較的長い時間にとたつて一つのモードを持続させ、その中で自由に旋律を「水平的」に展開することを重視した。^[1]

六、音楽理論の観点から見たモード・ジャズ

モード・ジャズは、ジョージ・ラッセルの著書『リディアン・クロマティック・コンセプト』の影響を受けており、和声（ハーモニー）ではなく旋法（モード）に基づくアプローチを採用した。モードとは、教会旋法に由来する7つのスケール（イオニアン、ドリアン、フリジアン、リディアン、ミクソリディアン、エオリアン、ロクリアン）などを指す。たとえばCドリアン・モードでは、「C・D・E・F・G・A・B」¹という音列を用いる。これ

はB♭メジャースケールと同じ音を使っているが、中心音(トニック)がCであるという点が異なる。このようなモードを中心に据えることで、一つのコード(またはモード)を長時間保持し、その上で自由度の高い即興演奏が可能となる。旋律的・リズム的なアイデアをじっくり展開できるため、より瞑想的で静かな印象を持つ楽曲も多い。

㍗ 『Kind of Blue』における実践

一九五九年にマイルス・デイヴィスが発表したアルバム『Kind of Blue』は、モード・ジャズの代表作であり、その特徴的手法を実践的に示した作品である。たとえば『So What』では、DドリアンやEブドリアンといったモードが長時間維持され、演奏者はそのモードの中で自由に即興を行うことができた。このような構造により、モード・ジャズでは「モチーフの展開」や「音の空間的配置」といった要素が重視されるようになり、短いフレーズやリズムパターンを変奏・発展させながらソロを構築するアプローチが可能となった。コード進行の変化を追いかけるビバップ的手法とは異なり、モード・ジャズはより静的で内省的な音楽表現を可能にし、即興演奏に新たな自由と構造的深みをもたらしたのである。

八、総括

モード・ジャズは、音楽理論的にも実践的にも、行き詰

まりを見せていたビバップに対して革新的な手法を提示し、即興演奏の新たな地平を切り開いた。複雑なコード進行に依存せず、旋法という原理に立脚することで、ジャズの表現をより抽象的で自由な次元へと導いた。モード・ジャズは単なるジャンルではなく、音楽構造に対する新たな視点を提示した運動とも言える。モードに基づいた即興演奏は、音楽の自由と構造のあいだに新たな均衡を見出す試みであり、その探究は今なお続いている。

注釈

(1) ジャズにおける「水平的」「垂直的」という思考の枠組みは、ジョージ・ラッセルが『リディアン・クロマティック・コンセプト』において初めて提唱した概念である。

参考文献

- ・蟻正行義「ジャズのための基礎知識」洗足音楽大学オンラインスクール (参照二〇二五年七月二七日)
https://www.senzoku-online.jp/theory/jazz/jz03_onkai-01.html
- ・「教会旋法」洗足音楽大学オンラインスクール (参照二〇二五年七月二七日)
<https://www.senzoku-online.jp/theory/classic/12/sepou-01.html>
- ・NPO法人ミュージックプランツ「音楽理論1」Music Planz (参照二〇二五年七月二七日)
<https://musicplanz.org/music-theory-1>

- ・NPO法人ミュージックプランツ「音楽理論②」Music Planz (参照二〇二五年七月二七日)
<https://musicplanz.org/music-theory-2>
- ・「リデュアン・クロマティック・コンサート」Sound Quest (参照二〇二五年七月二七日)
- ・「ロルトレーン・チェンジ」Sound Quest (参照二〇二五年七月二七日)
<https://soundquest.jp/quest/chord/chord-mv8/lydian-chromatic-concept/>
- ・「キー非依存のモード・チェンジ」Sound Quest (参照二〇二五年七月二七日)
<https://soundquest.jp/quest/chord/chord-mv6/tj-coltrane-changes/>
- ・Jun「ジャズの歴史」Note (参照二〇二五年七月二七日)
<https://note.com/junjunjupiano/n/196350e8a1d79#2ffbf546-2306-422f-af07-4f3787c1d185>

〈寸評〉 担当教員・菅原 研州

今年度の教養セミナーは、レポート作成技術修得を旨とした授業を行った。そして、学期末のレポートでは、各自自分が興味あるもの、好きなものについて調べ、まとめるという課題を提示した。

理由として、興味がある分野であれば、積極的に情報収集などを行い、結論を導きやすいためである。

伊原寛司さんは、自らジャズミュージックを演奏するほどであるが、このレポートでは、一九五〇年代末に誕生したモード・ジャズの背景と意義を、従来のビバップとの比較を通して論じている。

ビバップはコード進行に基づく即興を特徴とし、高度な技術と複雑な和声を発展させた一方で、演奏が難解化し、即興性が形式化するという課題を抱えていたとし、その極致がジョン・コルトレーンの『Giant Steps』であった。こうした状況への打開策として登場したのが、教会旋法を基盤とするモード・ジャズであったという。

モード・ジャズは、コードに縛られた垂直的思考から、旋法を持続させて旋律を展開する水平的思考へと即興の枠組みを転換した点に特徴があるという。マイルス・デイヴィスの『Kind of Blue』はその代表例であり、モード・ジャズは即興演奏に自由と新たな構造的深みをもたらした革新的な音楽運動であると紹介した。

実際、以上のように伊原さんのレポートをまとめてみたが、このレポートの内容は色々なことを教えられた。伊原さんには是非、自分の好きなことをしっかりと言語化し、今後の人生に活用して欲しい。

信用金庫がこの先も

存続するため

—経営課題から考える今後の展望—

小林 涼 華

(経営学科一年)

一、はじめに

信用金庫は相互扶助を目的とした金融機関として、会員である地域の中小企業や個人の生活を支えてきた。しかし、少子高齢化などの社会問題や近年のデジタル化の進展、世界情勢の影響などによって信用金庫及びその取引先である中小企業を取り巻く経営環境は大きく変化している。そのような状況下で信用金庫が存続していくにはどうしたらよいのか。本稿では、信用金庫が直面している主な経営課題と対応策を整理し、今後の展望について考察する。

二、信用金庫とは

信用金庫とは地域の事業者、個人が会員となって互いに地域の繁栄を図る、相互扶助を目的とした金融機関である。融資は中小企業や個人に限る、中小企業専門金融機関であるという特徴がある。地域に根差した組織であるた

め、信用金庫ごとに営業地域は限定されている。

三、信用金庫の主な経営課題

全国信用金庫協会が二〇二四年四月から取り組んでいる三か年計画をもとに整理する。ここでは大きく分けて四つの経営課題を挙げる。

一つ目は人口減少や少子高齢化の進展である。二〇一五年五月に日本銀行金融機構局から公表されたレポートでは「人口減少やこれに基づく地域経済への下押し圧力は、地方での資金需要の縮減をもたらしてきた」とある。これは人口減少が地域金融機関の中心的な業務である融資の需要を縮小させ、貸出利益の減少につながることを示している。特に、営業地域の限定されている信用金庫にとっては、その地域での人口減少は経営に大きな影響を与えることが考えられる。それに加え、事業主の高齢化による地元企業の廃業や後継者不足も融資需要を減少させる要因となっている。

二つ目はDXへの対応である。近年は様々な分野でDXが進んでおり、金融業界でも急速に広がっている。全国信用金庫協会ではDXについて次のように述べられている。

デジタル技術高度化の進展を経営力の強化へと繋げていくため、デジタルチャネルの充実・強化やDXによる業務改革を一層推進していく必要がある³⁾。

このようにDXへの対応は信用金庫でも急務とされている。

三つ目はESG、SDGsの推進である。ESGとは環境、社会、企業統治を考慮した経営活動を指し、これは持続可能な開発目標(SDGs)を達成する手段としても重視される。地域金融機関である信用金庫にとっても持続可能な地域づくりは重要な課題となり、ESGやSDGsへの取り組みは早急に取り組むべき課題といえる。

四つ目は持続的な人的基盤の確立である。信用金庫の現状として営業店業務の増加と職員の通減や多様な職員の活躍の必要性が挙げられている。こうした中で、人材確保、離職防止に努め、職員一人ひとりの能力向上に取り組みることが不可欠である。

四、諸課題への対応策と具体例

諸課題への対応策については全国信用金庫協会が発表している「二〇二五年度全信協事業計画」をもとに五つ挙げ

る。一つ目は、人口減少等の外部環境の変化に伴う信用金庫経営に資する情報提供に努めるという対応策である。具体的な取り組み例としては富士信用金庫の「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン」への取り組みが挙げられる。このビジョンは人口減少をめぐる問題に関する国民の認識の共有を示すとともに、目指すべき将来像を提示することを目

的としている。本金庫では、他の金融機関と新たに連携することで地域の中小企業・事業者の支援を強化し、産官学金労言と連携することで人口減少によって縮小した地域経済の活性化、雇用機会の創出を図った。

二つ目は、スマホアプリやATMなど非対面チャネルの高度化及び業界のデジタル戦略に関わる検討・推進という対応策である。主な取り組みとして「しんきんバンキングアプリ」と「しんきん通帳アプリ」の提供がある。この二つのアプリではスマホで振込や口座残高の確認ができ、顧客にとってはATMや実店舗へ足を運ばなくてもよいという利点があった。しかし、スマホによる振り込み機能の制限やUI設計などの課題も存在した。そこで新たな取り組みとして、それらの課題を解消し双方を統合させたアプリの開発も行っている。これによってさらに高度なDX化が期待できる。

三つ目は、ESG金融やSDGsに関する各種取組事例などについての情報提供等を行い、信用金庫の取組みを支援するという対応策である。全国信用金庫協会では「monthly信用金庫」などの機関雑誌が発行されており、そこでESGなどについて取り上げるなどの取り組みを行っている。これにより、信用金庫の職員のESGやSDGsの理解が深まり、推進への施策が生まれることが期待される。

四つ目はエンゲージメント調査による社員の現状の把握

とそれを踏まえた働きやすい環境の整備である。具体的な取り組みとしては全国信用金庫協会と株式会社 HRBrain の提携が挙げられる。この提携によって全国の信用金庫へエンゲージメントサーベ이의導入が推進され、従業員エンゲージメント調査とその分析結果は人的資本経営の改善策の実行・検討に役立てられる。この取り組みでは、従業員の期待と労働環境のギャップを埋め、職員満足度の向上や離職率の防止が期待される。

五つ目は、社会環境の変化や研修ニーズを踏まえた人材育成カリキュラムの企画・実施と通信講座に関わる教材全体のデジタル化である。二〇二五年度から、全国信用金庫協会は職員向けの通信講座の採点システムに AI を導入した。それに加え、答案用紙の提出・返却方法を紙から画像データに変更し、これらの取り組みによって全信協に直接答案などを提出する職員が二〇二四年度と比べ約一〇〇〇人増えたという。そのうえ、人事担当者の負担軽減への寄与による労働環境の改善も期待できる。

五、まとめ

本稿では、信用金庫が直面している経営課題とその対応策に加え、具体的な取り組みについて調査した。その結果、信用金庫は地域経済に欠かせない存在である一方、人口減少等により委縮した地域経済の活性化や近年様々な業界で推進されている DX、SDG.s への対応、そして組織

内部の人的基盤の確立が求められていることが分かった。そして、その対応のために、国や外部企業と連携した施策・新システムの導入や課題の解決に関する情報の提供といった取り組みが行われていることも判明した。

これからの展望としては、今まで行われてきた取り組みは推進・改良を継続しつつ、地域社会の変化や新たなデジタル技術の出現、組織内部の労働環境の現状や従業員の期待にいち早く目をつけ、経営課題の改善に取り入れることが求められる。そして、信用金庫存続のためには、それらを地域繁栄に繋げることが望まれるだろう。

今後も信用金庫が地域の繁栄に善進し、よりよい地域経済を作り上げていくことを期待する。

注

- (1) 全国信用金庫協会「しんきん『未来を拓く変革への挑戦』3 年計画」信用金庫の進化の発揮と地域の持続的発展を目指し
「しんきん」<https://www.shinkin.org/about/chuuki/pdf/choukan.pdf>
(最終検索日：二〇二五年七月二七日)
- (2) 日本銀行金融機構局「人口減少に立ち向かう地域金融―地域金融機関の経営環境と課題―」<https://www.boj.or.jp/research/bnp/fsr/data/fsr150529.pdf> (最終検索日：二〇二五年七月二七日)
- (3) 全国信用金庫協会「2025 年度全信協事業計画」<https://www.shinkin.org/about/disclosure/pdf/05.pdf> (最終検索日：二〇二五年七月二七日)

- (4) 二〇一四年二月二十七日に閣議決定された人口減少、少子高齢化に対応するためのビジョン。
(5) 一九五一年から発行している信用金庫業界の機関誌。金融・経済の動向や信用金庫経営に関する諸問題の解説などを掲載している。

参考文献

- 石川清英『信用金庫破綻の教訓―その本質と経営行動―』日本経済評論社・二〇一二年
国土交通省『まち・ひと・しごと創生』に関する主な施策等に「こころ」
https://www.cbr.mhl.go.jp/pdf/yorozu_shisetsu.pdf (最終検査日：二〇一五年七月二十七日)
信金中央金庫 地域・中小企業研究所「DX人材育成への取り組み」・二〇二一年
https://www.schri.jp/publication/assets/geppo_2022-10-6.pdf (最終検査日：二〇一五年七月二十七日)
全国信用金庫協会「信用金庫と銀行・信用組合との違い」
<https://www.shinkin.org/shinkin/difference/> (最終検査日：二〇一五年七月二十七日)
全国信用金庫協会「刊行物の紹介」
<https://www.shinkin.org/about/publication/> (最終検査日：二〇一五年七月二十七日)
東京都信用金庫協会「信用金庫とは」
<https://www.tasb.jp/kinko/index.html> (最終検査日：二〇一五年七月二十七日)
内閣府「令和2年度障害者差別解消の推進に関する国内外の取組状況調査報告書」

- <https://www8.cao.go.jp/shougai/suisshin/iyosa/r02kokusai/index.html> (最終検査日：二〇一五年七月二十七日)
日本銀行「我が国の銀行におけるデジタル・トランスフォーメーション(DX)」
https://www.boj.or.jp/research/wps_rev/rev_2021/data/rev21j02.pdf (最終検査日：二〇一五年七月二十七日)
ニッキンONLINE「信金 個人向け業界アプリ刷新 28年から一本化し提供」
<https://www.nikkinonline.com/article/246158> (最終検査日：二〇一五年七月二十七日)
ニッキンONLINE「全信協 信金の人手不足解消へ 就業意識調査で離職防へ」
<https://www.nikkinonline.com/article/239825> (最終検査日：二〇一五年七月二十七日)
ニッキンONLINE「全信協 スイホで通信講座の答案提出採点システムにAI導入」
<https://www.nikkinonline.com/article/273311> (最終検査日：二〇一五年七月二十七日)
富士信用金庫「まち・ひと・しごと地方創生に向けた当金庫の取組みについて」
<https://fujishinkin.jp/important-news/skraa37gr2psybc6.html> (最終検査日：二〇一五年七月二十七日)
毎日新聞「全国信用金庫協会とHRBrainがタッグ 信用金庫のエンゲージメントを可視化・改善離職防止と生産性向上へ(PR TIMES)」
<https://mainichi.jp/articles/20250618/pr2/00m/020/335000c> (最終検査日：二〇一五年七月二十七日)
リクナビ「信用金庫業界とは？ 仕事・業界研究」

〈寸評〉

担当教員・菅原 研州

今年度の教養セミナーは、レポート作成技術修得を
目指した授業を行った。そして、学期末のレポートで
は、各自自分が興味あるもの、好きなものについて調
べ、まとめるという課題を提示した。

理由として、興味がある分野であれば、積極的に情報
収集などを行い、結論を導きやすいためである。

小林涼華さんは、「信用金庫」について調べ、まとめ
ている。確かに、地域に密着した金融機関というイメー
ジはあるが、これまで取引をしたことがなければ、それ
ほど知ることは少ないかと思う。

その点、本レポートは、信用金庫が今後も存続・発展
していくために必要な経営課題と対応策を整理し、将来
の展望を示したものである。

信用金庫は地域の中小企業や個人を支える相互扶助型
金融機関であるが、人口減少・少子高齢化による融資需
要の縮小、DXへの対応、ESG・SDGsの推進、人
的基盤の確立といった課題に直面している。これらに対
し、全国信用金庫協会は地域経済活性化に向けた情報提
供、非対面チャネルの高度化、ESG・SDGsに関する
支援、エンゲージメント調査による職場環境改善、人

材育成のデジタル化などの施策を進めている。今後は、
こうした取り組みを継続・発展させつつ、社会環境や技
術の変化を的確に捉え、地域の持続的繁栄につなげるこ
とが信用金庫に求められるという。

以上の通り、小林さんのレポートの概要を示したが、
身近で名前だけは知っていても、中身を知らないこと
は、常に知的対象となることを、改めて教えられた。小
林さんには今後も、今回のレポート作成の経験を活かし
て、各講義などでの課題に取り組んで欲しい。

ビブリオバトル

豊田唯依

(経営学科一年)

一、はじめに

「ビブリオバトル」とは、京都大学大学院情報科学研究科の谷口忠大教授が考案した、ゲーム感覚を取り入れた新しいスタイルの「書評合戦」である。ルールは、発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まり、順番に一人五分間で本を紹介するが、発表参加者はレジュメやプレゼン資料の配布はおこなわずできるだけライブ感をもって発表する。

そしてそれぞれの発表の後に、参加者全員でその発表に関するディスカッションを二〜三分間行う。全ての発表が終了した後に、「どの本が一番読みたくなかったか？」を基準とした投票を参加者全員が一人一票で行い、最多票を集めた本を「チャンプ本」とする。

二、選んだ本について

今回私がビブリオバトルで紹介した本は、和田正雪さんの『特定しないでください』である。この本は、ビブリオバトルで紹介するための本を書店で探していた際にPOP

付きで大々的に宣伝されていたのを見て購入した。

本の内容を紹介すると、インターネット上の何気ない投稿をきっかけに、匿名であるはずの人物が少しずつ特定されていく様子を描いた小説である。作中では、SNSや掲示板などの身近なネット空間を通して、情報が拡散される怖さや、個人情報簡単に繋がってしまう現代社会の危うさが描かれている。読者は、「自分も同じ立場になるかもしれない」と感じながら、ネットとの向き合い方を考えさせられる作品である。

三、注意したこと

私が発表原稿を考えた時に、注意したことを二つ挙げておきたい。

一つ目は、小説のあらすじを語りすぎないようにすることである。理由は、この本がミステリー小説であるため、内容に触れすぎるとネタバレになってしまうからである。話し過ぎると、ミステリー小説の醍醐味である謎を考えながら読み進め、最後に真相が明かされたときの「なるほど！」という驚きを失わせる危険性があり、自分も読みたいと思わせる事が難しい。そのため私はあらすじを話すかわりに、この小説がモキュメンタリー方式で書かれているなどの特徴を主に発表し、小説の構成の面白さを主張した。

二つ目は、小説内の謎や違和感を現代を生きる私たち

に繋げて発表したことである。この本はSNSを題材としているため、読んでいて他人事とは思えない場面が多々ある。小説内で感じた謎や恐怖は、実は身近なところで起こりうる可能性が伝わるよう例えを使って発表した。

四、最後に

今回のビブリオバトルを通して、自分の伝えたいことを五分間という制限時間のなかで、間違いなく伝えることの大変さを感じた。原稿作りの段階で、時間配分を踏まえて構成を考え、本の魅力が少しでも伝わるように言葉選びにも注意した。

また、私の発表順は後半だったため、先に発表している人の内容を聞いていいと思った部分を自分の原稿に落とし込み、講義でみたビブリオバトルの発表動画から問いかけを入れるなど、聞き手の意識がこちらへ向くような工夫を取り入れようと努めた。しかし本番の発表では、家で練習したように上手く話すことができず、声の大きさや話すスピード、聞いている側を気にしながら五分間で全てを終わらせることが、いかに難しいかを実感した。

久しぶりに本を読んで、読書の楽しさを改めて感じた。時の流れを忘れるくらい物語に没頭し、ページをめくるとき心が躍るような感覚は、読書からでしか得ることのできないと考える。今後も電車に乗っているときや、普段スマートフォンを触っている時間を読書にあて、習慣化でき

るようにしたいと考える。

参考資料

・全国ビブリオバトル「ビブリオバトルとは」

<https://www.bibliobattle.jp/rules>（最終検索日：二〇二五年

一月二〇日）

・知的書評合戦ビブリオバトル公式サイト「公式ルール」

https://zenkoku.bibliobattle.jp/univ_bibliobattle/bibliobattle

（最終検索日：二〇二五年一月二〇日）

・和田正雪『特定しないでください』小学館・二〇二五年

〈寸評〉

担当教員…菅原 研州

今年度の教養セミナーIIは、ビブリオバトルを行いながら、受講者全体の読書習慣の確立や読書量の増加、またプレゼンテーションの修得を目指した。

豊田唯依さんは、これまで多くの読書をしてきたわけではないが、ビブリオバトルではその日の「チャンプ本」に選ばれている。つまり、その紹介は他の受講者の共感を招いたのである。

そこで、「チャンプ本」に選ばれるために取られた方法は、今回のレポートで解説されたように、事前に他の発表を良く視聴し、自分で選んだ本に相応しい方法を選んだ様子が分かる。

また、本自体の選抜方法にも関心を持たざるを得ないが、豊田さんは書店でPOP付きで紹介されていた和田

正雪氏『特定しないでください』（小学館・二〇二五年）を選んだ。それは、この小説の内容が、現代のSNS及びその周辺に存在する問題をテーマとして論じられ、豊田さん本人も、あるいは他の受講者にとっても、身近な問題として受け取られやすいと判断されたためである。

よって、選ばれた本、発表内容ともに充実しており、チャンプ本の獲得へと繋がったのである。しっかりとした準備を正しく行ったことを良き経験として、豊田さんには今後も大学での学びを熱心に進めて欲しい。

なぜ私たちは甲子園に

熱狂するのか

宮本実結

（経営学科一年）

毎年夏になると、日本中が高校野球、すなわち「甲子園」に熱狂する。全国の都道府県を代表する四九校が優勝を目指し、熱戦を繰り広げるこの大会は、単なるスポーツの域を超えた特別な存在として、多くの人々に夢と感動を届けてきた。甲子園は、現在百年以上の歴史を持ち、夏の風物詩となっている。炎天下の中、白球を追いかける高校生たちの姿に、なぜ私たちはこれほどまでに心を動かされるのだろうか。その盛り上がり背景には、甲子園ならではの魅力やエピソード、そして日本人特有の「好み」が関係しているのだろうか。

一九一五年、新聞社主催のもと「全国中等学校優勝野球大会」として大阪で第一回が開催されたこの大会は、当初はわずか十校による小規模なものだった。しかしその後、参加校数が増え、全国規模の大会へと拡大していった。戦後の一九四八年に学制改革を受け、大会名を「全国高等学校野球選手権大会」と改め、現在までその名が受け継がれている。一九二四年には現在の阪神甲子園球場が完成する

が、この年は暦の干支を構成する「十干」と「十二支」それぞれの最初である「甲」と「子」が合わさる縁起のいい年であったことから、この地域は「甲子園」と名付けられ、球場は「甲子園大運動場」と名付けられた。

長い歴史とともに発展してきた甲子園には、時代ごとに多くの感動的な試合や人物が生まれてきた。その中でも特に人々の記憶に残っているであろうエピソードをいくつか紹介したい。

まず、一九八〇年代に甲子園を席卷したのが、PL学園の「KKコンビ」こと桑田真澄と清原和博である。彼らは五季連続で甲子園に出場し、春夏合わせて二度の全国制覇を果たした。桑田の投球と清原の打撃は多くの観客を魅了し、高校野球のスター選手像を確立した。そして、平成最後の夏に「金農旋風」を巻き起こし、全国を熱狂させた秋田県の金足農業である。全員地元出身の公立高校の選手たちが、競合私立校を次々に破り決勝まで進んだその快進撃は、「雑草魂」や「下剋上」といった言葉とともに、多くの人々の共感を呼んだ。

この二つのエピソードから、甲子園が単なる野球の大会にとどまらず、日本人の価値観や感情と強く結びついていることがうかがえる。KKコンビのような華やかなスター選手たちの圧倒的なプレーは「次世代の子供たちの憧れ」や「団結や希望」といった強い印象を与える。一方、金足農業のような地方の公立校が魅せた「仲間との絆」や「地

域愛」、「逆境を乗り越える姿勢」は多くの日本人が共感し、応援したくなる要素だ。こうした多くの魅力が合わさり、甲子園は世代を超えた熱狂を生み出している。

こうした甲子園の盛り上がり背景には、日本人独特の価値観や好みが大きく関わっていると考えられる。哲学者の池田晶子は、日本人が「努力」や「忍耐」を美德とし、集団や仲間を思いやる「和」の精神を重んじることを指摘している。また、新渡戸稲造の『武士道』では「克己」や「忠義」といった概念が日本文化の根幹にあり、これらが努力と忍耐の精神を支えていると説かれている。これらの価値観は、甲子園での「勝利への執念」や「仲間との絆」、「地域愛」といった要素に共鳴し、多くの日本人が甲子園に熱狂する大きな理由となっている。

そして、こうした価値観に感情移入しやすい環境を整えているのが、テレビをはじめとするメディアの存在である。特にNHKによる全国中継は、甲子園を全国規模のイベントとして定着させる大きな要因となってきた。映しだされる選手の表情、試合中のハイライト、応援席の熱気、試合後の涙や喜びといった場面はたとえ球場にいなくても視聴者の心を揺さぶる。また、選手の生い立ちや学校の背景に焦点を当てる演出が、視聴者の共感や応援したくなる気持ちをもさらに高めている。こうして、メディアは甲子園の「感動」をより深く、広く伝える役割を果たし、日本人の好みと重なる要素を際立たせている。

このように、甲子園は単なる高校野球の大会ではなく、日本人の価値観や感情と深く結びついた、特別な存在であることがわかる。負けたら終わりの試合、筋書きのないドラマ、未来のビッグスターの誕生、といった要素は、私たち観る人の心を動かし、共感や感動を呼び起こす。そして、その魅力がテレビなどのメディアを通し伝えられていくことで、より多くの人が甲子園に引き込まれていく。

私自身、野球一家だったこともあり、小さいころから野球が好きで、家族と一緒にテレビ中継で甲子園を見たり、試合の応援で球場に足を運んだりしたことがある。九回裏最後まで諦めずに戦い抜く選手たちの姿、スタンドからの気持ちのこもった応援、試合後に互いをたたえ合う光景にスポーツの持つ力を実感した。甲子園での戦いは、勝敗はもちろんのこと、それ以上に選手一人一人が見せる「ひたむきさ」や「一球一打にかける気持ち」こそが、観る人の心に残り「甲子園」に熱狂する要素だと考える。

これから先、様々なものが変化していく中でも、甲子園が持つ魅力は変わらず、多くの人を魅了するだろう。甲子園という舞台は、今後も多くの人々の夢と情熱を乗せ、人々の心に刻まれていくだろう。

参考資料

日本高等学校野球連盟（高野連）「甲子園の歴史」

<https://www.jhbf.or.jp/sensyukuen/history/>（二〇二五年七月）

一五日確認

まったりどうでしょう【高校野球】KKコンビ甲子園成績一覧

<https://mataridoudesyou.com/?p=39616>（二〇二五年七月一日）

五日確認

やっぱり甲子園（高校野球）「金足農（秋田県）甲子園での成績

（戦績）」

<https://sbb.jp/school/673/game/>（二〇二五年七月一日）

池田晶子『日本人の心の構造』岩波書店・二〇〇一年

新渡戸稲造『武士道』岩波文庫・一九九八年（原著一九〇〇年）

〈寸評〉

担当教員・菅原 研州

今年度の教養セミナーは、レポート作成技術修得を目指した授業を行った。そして、学期末のレポートは、各自自分が興味あるもの、好きなものについて調べ、まとめるという課題を提示した。

理由として、自分が好きな分野などであれば、自ずと情報への接し方が積極的であり、想いが乗ればレポートもまとめやすいためである。

宮本実結さんは、「甲子園球場」で開催される高校野球の魅力について調べ、まとめた。特に、なぜ日本人が甲子園に強く惹きつけられるのかを、その歴史、象徴的エピソード、日本人の価値観、メディアの役割など多角的に考察したものである。

野球大会としての「甲子園」は、百年以上の歴史を持つ大会であり、高校生が全力でプレーする様子は、単な

るスポーツを超えた国民的行事として定着した。更に、PL学園のKKコンビに代表されるスター選手の活躍は憧れと希望を生み、金足農業の快進撃は努力や仲間との絆、下剋上といった要素で共感を集めたとしている。

また、こうした姿は、日本人が重んじてきた忍耐、努力、和の精神、克己といった価値観と深く結びついていることを指摘した。

そして、テレビ中継を中心としたメディアが選手や学校の物語を伝えることで感動が増幅され、世代を超えた熱狂が生まれたとし、甲子園は今後も人々の心を動かし続ける特別な存在だろうと推定している。

引き続き、宮本さんには今回のようなレポート作成技術を使いこなし、大学での学びを深めていただきたいと願う。

日本の宗教観がアニメへ

もたらす影響

筒井 由奈

(経営学科一年)

本稿の目的は、アニメ作品に宗教的要素が多く見られる理由を明らかにすることにある。そこで、アニメと宗教観の関連性を考察する。特に、「アニメにおける宗教観の役割」という機能的な視点、そして「アニメに表れる宗教観」という表現的な視点から考察を行う。また、本稿で扱うアニメと宗教観の範囲は、いずれも現代の日本を対象とする。

まずアニメにおける宗教観の役割は、作品のメッセージを理解する手がかりになることだと考えられる。その例として、スタジオジブリの『となりのトトロ』を挙げる。『となりのトトロ』とは、サツキとメイという姉妹が田舎に引っ越し、森に住む不思議な生物トトロと出会う物語だ。一見、宗教との関連は薄いように思えるが、宗教学者である正木晃によれば、この作品にはアニミズム的な世界観が反映されている。アニミズムとはイギリスの人類学者であるE・B・タイラーが提唱した、この世にあるほとんどすべてのものには魂が宿っているという考え方である。付

喪神や八百万の神という存在があるように、日本人にとってこの宗教観は馴染み深いだろう。また、書籍『宗教と人間』にもタイラーの推論についてこのように言及されている²⁾。

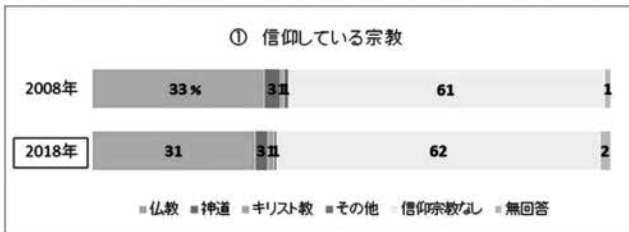
人間にある魂は、動物、植物、無生物にもあるはずで、そうなるに精霊信仰が成立する。その精霊のなかには固有名詞を持つものも現れ、人格神へと変化し、多種の精霊信仰をふくむ多神教となり、さらに唯一神教になるという。

では、アニミズムは『となりのトトロ』のどのようなメッセージを伝えているのか。それはトトロの正体から読み取れるだろう。正木は、トトロをクスノキの神様だと考察している³⁾。その根拠として、メイがトトロと初めて出会う場面では、トトロがクスノキの幹の中で寝ていた点を挙げている。クスノキは巨木に成長すると、中心の部分が腐ってなかにかなり大きな空洞ができる場合が多く、古来より日本では神々しい木とされてきた。そのため、その木がトトロの寝床であることはトトロが神秘的な存在であることを暗示している、と言及している。こうした正木の考察を踏まえ、タイラーのアニミズム的な視点から考えると、トトロはクスノキに宿った魂が人格神へと変化した存在だと解釈できるのではないだろうか。つまりトトロはア

ニミズム、そして自然を象徴したキャラクターであり、そのトトロと人間のメイやサツキの交流を描くことで、作者は自然と人間の共生というメッセージを伝えていると考えられる。宗教観を手掛かりに作品を読み解くことで、アニメの世界観や印象が変化し、物語の解釈も広がるだろう。したがって、宗教観とは物語の本質を伝えるための重要な仕掛けだといえる。

ここまでは、宗教観がアニメの中でどのような役割を果たしているのか、という機能的な視点から考察したが、ここからは宗教観が作品にどう表れているのか、という表現の視点から考察する。まず、私は他の日本アニメ作品のテーマを比較することで、日本人の宗教観を可視化できるのではないかとという仮説を立てた。その結果、日本人の宗教観が柔軟であるかという結論に至った。その根拠を示すために、まずは日本の宗教信仰に関するデータを参照する。

表1



小林利行 (2019) より

表1は、二〇〇八年と二〇一八年に、NHKによって行われた日本人の宗教信仰の割合の調査^①から引用したものである。二〇〇八年と二〇一八年のデータを見比べても、仏教が約三〇パーセント、無宗教が約六〇パーセントとなり、十年の歳月を経ても結果はあまり変化していないことが分かる。このデータを見ると、日本人の半数以上は無宗教という結論に行き着くが、私は日本人の生活に宗教がないというわけではないと考えている。なぜなら、日本には仏教や神道が由来のお盆や正月だけでなく、キリスト教が由来のクリスマスやハロウィンも盛んに催されているからだ。日本は無宗教の割合が多いはずなのに、なぜか行事や文化となると宗教色が多彩になる。そしてこれは日本のアニメにも表れているだろう。先程アニメの例として挙げた『となりのトトロ』以外にも、使徒やロンギヌスの槍などのキリスト教用語が数多く登場する『新世紀エヴァンゲリオン』などがある。ジャンルで考えれば、近年よく見かける異世界転生ものは仏教の輪廻転生の要素が垣間見える。以上の点を踏まえると、日本人は宗教において、信仰よりも文化や考え方に魅力を感じるのではないだろうか。実際、書籍『宗教と人間』^②では日本人の宗教観について以下のように言及されている。

現代においては、特定の宗教儀礼と意識されずに、習俗・慣習として社会に受容されている儀式も多い。特

に日本においては、神と仏の混淆にみられるように、異なる宗教が複合した形態を特徴としており、「重層信仰」（シンクレティズム）と称されている。

つまり日本人はあまり神を信仰しないものの、異なる宗教や文化を柔軟に受け入れているため、それが作品のモチーフとして自然に用いられやすいと考えられる。そして先述の通り、宗教観とは物語の本質を伝えるための重要な仕掛けのため、この種類が多ければ多いほど作者のメッセージ性を高められるだろう。だからこそ、日本のアニメには宗教的要素が数多く登場するのもかもしれない。

以上の考察から、アニメ作品に宗教的要素が多く見られるのは作者のメッセージを感じ取るためであるほか、日本人の宗教観が柔軟で、作品のモチーフとして取り入れやすいためでもあると結論付けた。こうした考察を進める中で私は多くの宗教観に触れてきたが、改めて振り返ると、それぞれの背景からは当時の人々の考えの積み重ねを感じ取れる。もしかすると、日本が世界でも有名なアニメ大国になった理由の一つには、無宗教でかつシンクレティズムで、世界各地の濃厚な宗教文化を作品に取り入れられたこともあるのかもしれない。

参考文献

(一) 正木晃『お化けと森の宗教学 となりのトトロといっしょ

に学ぼう』春秋社、二〇〇二年、九〇頁

(2) 愛知学院大学宗教研究会『宗教と人間 真の生き方を求めて』(第二版) 大東出版社、二〇〇五年、一二頁

(3) 正木、前掲書、一六八頁、一七五―一七八頁

(4) 小林利行「日本人で宗教を信仰している人は何%? 増えるの減っているの?」<https://www.nhk.or.jp/bunken/blog/5003674f3.html>、二〇一九年(最終アクセス日:二〇二五年一月二〇日)

(5) 愛知学院大学宗教研究会、前掲書、二頁

〈寸評〉

担当教員・鷲嶽 正道

今年度の教養セミナー・IIは、学生が自らの力で考え、仲間と協働し、成果を発表することを中心に実施しました。成果物は、グループプレゼン(プレゼンのしかたやメディア使用は任意)、個人でのブックレビュー(口頭発表)、個人プレゼン(スライドメディアを使用)、個人レポートと、多岐に渡りましたので、学生達は大変だったと思いますが、活動を通して、学生達は仲間と話し合い協力しあうこと、ひとりだけで考え課題を解決すること、そして媒体に合わせた発表のしかたを身につけられたのではと感じています。

こうした「忙しい」授業活動の中で、筒井さんはグループ活動中には時にグループを牽引するリーダーシップを、時に他の学生をサポートするフォローシップを発揮していました。また、ブックレビューと個人プレゼン

ンでは原稿を入念に準備した上で相手に伝わるパフォーマンスを披露しました。最終課題であるレポートでは学習した文章技術をしつかりと活用して自分の考えを示しました。この一年間の筒井さんの努力と学びに対する真摯な姿勢は、これから入学してくる後輩達の手本となると評価し、筒井さんのレポートを推薦します。

筒井さんのますますの活躍を祈念します。

サンタクローズと犯罪

野村有加

(法律学科一年)

はじめに

サンタクローズは、冬に訪れる子供にプレゼントを届ける幻の存在で、赤い服を身に付け大きな白髭をはやしているのが一般的なサンタクローズ像であるだろう。そんな幻の存在であるからこそ許容されているが、サンタクローズの行為は、法律に抵触してしまう行為が多くあるのではないかと考えた。そこでサンタクローズの行為を、世間一般の法律にあてはめてみたらおもしろいのではないかと考え、このテーマにすることに決めた。

煙突から侵入する行為について

サンタクローズは、一般的に夜中に煙突から民家に侵入して子供の枕元にプレゼントを届けると考えられている。現代では煙突のある家は少なくアパートやマンションなどに住む人も多いが、伝統的なサンタクローズの行為は、煙突から侵入する行為であるため、今回は煙突から侵入することのみにフォーカスをあて、法的な視点から見えていくこととする。この行為は刑法第一三〇条の住居侵入等に違反

するのではないかと考えられる。刑法一三〇条では「正当な理由がないのに、人の住居若しくは人の看守する邸宅、建造物若しくは艦船に侵入した者は、三年以下の拘禁刑又は一〇万円以下の罰金に処する」と定められている。この刑法一三〇条でポイントとなるのは、「正当な理由」と「侵入」というワードがポイントとなる。

まずは、「侵入」というポイントから見えていく。「侵入」とは家主の同意なく住居などに立ち入ることであると定義した場合、サンタクローズは、夜中に煙突から他人の住居に立ち入り、こっそりとプレゼントを置いていくという行動をとっているため、形式上では「侵入」の定義に当てはまることになる。

次に、「正当な理由」の有無である。サンタクローズの行為に正当な理由が存在するかについては複数の視点で検討する。一つ目の視点は、サンタクローズの目的は子供にプレゼントを届けることであり、子供またはその親はサンタクローズが訪れることを待ちわびている場合がある。この場合、直接的な家主からの同意があるわけではないが、間接的にサンタクローズが訪れることに同意しているといえる。また、サンタクローズには子供からプレゼントを望む手紙が届いている場合もあるだろう。その場合は家主からの同意が得られたとほぼ同じであり、正当な理由があったということができる。また、夜中に訪れるサンタクローズのためにミルクとクッキーが用意されている家もあるかもしれない。その場合

は、サンタクローズは招かれざる訪問者ではなく、むしろ歓迎されていることができるだろう。

次に、サンタクローズの煙突から立ち入るといふ行為であるが、これは社会の伝統的な皆が知っている行為である。そのため、サンタクローズの行為は社会的に容認されており、違法とは評価できないのではないかとこの解釈を挙げる。

結論として、サンタクローズの夜中に煙突から侵入するという行為は、煙突から他人の住居にこっそりと立ち入っているため「侵入」といえる。しかし、サンタクローズはその家の子供又は親に訪問することを待ちわびていられる可能性があり、侵入するのに「正当な理由」があるといえる。そのため、サンタクローズが行っている行為は住居侵入罪に違反しないといえる。しかし、例外としてサンタクローズがどうしても来てほしくないと望む家庭に侵入した場合は、サンタクローズの行為は違法となりうる可能性があるといえる。

おわりに

今回サンタクローズの行う煙突から他人の家に侵入するという行為について、刑法一三〇条の条文を使いながら検討した。サンタクローズの行為は普通の一般人が行えば、到底、刑法一三〇条に違反しうる行為であるが、サンタクローズが行えば、抵触しないのではないという結論が出た。今回の件を考察し、まだ授業などでもあまり触れられ

ていない刑法という分野の条文を調べてみて、法の解釈などを考えることはとても学びとなった。そして、様々な視点で見るときつけかけにとなり、今回このテーマを選んでよかったと思うことができた。

参考文献

<https://ja.wikibooks.org/wiki/%E5%88%91%E6%B3%95%E7%A%C%AC130%E6%9D%A1>
<https://www.benghinoba.jp/criminal-case/article1507.html>

〈寸評〉

担当教員…河合 泰弘

私の教養セミナーのキャッチフレーズは、「趣味から始める学問入門」であり、各学生が自己の趣味や関心事をより深く探究し、春学期にはそれをレポートにまとめ、秋学期には春学期にまとめたレポートをもとに口頭発表をすることを課した。

野村さんは、広く社会で受け入れられているサンタクローズのプレゼントを届けるという行為について無条件に容認せず、法学部の学生らしく、法律に照らしたならば違法にならないだろうかという疑問を持ち、刑法第一三〇条の住居侵入等に違反する恐れがあるという仮説を立てて論証してくれた。一見荒唐無稽のように感じる議論だが、常識にとらわれない独自の視点は大変評価できる。野村さんのこれからの飛躍を期待する。

カプセルトイの魅力と広がり

木村 萌々夏

(法律学科一年)

はじめに

私たちの身の回りには「ガチャガチャ」や「ガシャポン」などの愛称で親しまれるカプセルトイが数多く存在している。きつと多くの人が一度はカプセルトイをやったことがあるだろう。近年その台数やシェア数は増加傾向にあり、カプセルトイ専門店も街中で頻繁に見られるようになってきた。そこで、カプセルトイの魅力や歴史について調べた。

広がり

カプセルトイは、もともと一八八〇年頃にアメリカに存在していたキャンディやガムの自動販売機が原型と言われており、その機械が進化してガムボールマシンとなった。当時は商品がカプセルに入っておらず、故障が多いという問題点があった。そこで一九五六年、衛生的で壊れにくいカプセルがアメリカで開発され、カプセルトイが誕生した。驚くことに当時のアメリカのメーカーは、カプセルの中に入れるおもちゃを作るため、わざわざ日本や香港でハ

イレベルの技術を持つ職人を探し、制作を依頼していたそうだ。

そしてその十年後、高度経済成長期の最中であった一九六五年に「ペニ商会」という日本の会社によって、アメリカから日本へカプセルトイが輸入された。輸入された当時は、一〇円や二〇円のカプセルトイが主流で、中身は安価で軽量な子供向けのおもちゃだった。一九七〇年代にはカプセルトイが日本全国へと広がり、一九八〇年代には「キン肉マン消しゴム」や「スパーカー消しゴム」などが子供の興味を惹きつけ、第一次カプセルトイブームとなった。一九九〇年代の第二次ブームでは、商品がよりカラフルになり、精密な商品が人気となった。その後二〇一二年頃に「コップのフチ子」が大ヒットしたことで第三次ブームとなり、コロナ禍で行動が制限された二〇二一年には人との接触が少なく安価で楽しむことができるため再熱し第四次ブーム、そして現在は第五次ブームが到来していると言われている。

増加傾向

近年カプセルトイの台数が増加し続けており、大型商業施設や街中でカプセルトイ専門店を多く見かけるようになってきた。いったいなぜこんなにもカプセルトイが増加したのだろうか。これには大きく分けて三つの要因が考えられる。

一つ目は、コロナ禍による空き店舗の増加と省スペースでの出店のしやすさである。私たちの生活に大きな影響をもたらしたコロナウイルスによつて、経営が苦しくなった店の閉店などから商業施設や駅の周辺で空き店舗が増加した。カプセルトイは比較的少ないスペースでも設置可能なため、そのスペースを活用してカプセルトイ専門店が多く出店したと考えられる。また、カプセルトイは非接触で楽しむことができるため需要が高まったとされる。

二つ目は、高品質な商品とSNS映えである。近年のカプセルトイの自身は以前よりクオリティが向上し、緻密に作られたフィギュアや人気キャラクターグッズなどが多く登場している。これらの商品は話題作りとしてInstagramやTikTokなどのSNSでシェアされやすいことから需要を伸ばしていると考えられる。

三つ目は、大人の需要が増加したことである。カプセルトイと言えば子供向けのおもちゃというイメージが強かったが、近年ではコレクションしたくなるような商品や、よく知る製品のミニチュアが出てくるものも登場しており、大人も欲しくなる魅力的な進化を遂げているためだと考えられる。ご当地限定の商品や大人にとって懐かしいキャラクターなどがあることも、子供と一緒に楽しむカプセルトイを楽しむ要因となっている。

心理との関係

一度回したあと、手に入れた商品を気に入る、つい何度か回してしまったという経験をした人も多いだろう。これは心理学でいう「デイドロ効果」がはたらいていると言われている。デイドロ効果とは、自分の生活の中に今までとは違う「理想的な価値」がもたらされたとき、その新しい「理想的な価値」に合わせて所有物や環境を統一させたいという心理効果である。つまり、一度回すと関連するアイテムも揃えたいくなるというデイドロ効果による心理がはたらき、何度も回したくなるのだ。

また、カプセルトイを回すことは日々のストレス解消とも繋がりがあるとされている。人間関係や仕事上での予期せぬトラブルなど、私たちは常に外部の要因に影響されながら生活している。その中でカプセルトイは、外部からの影響ではなく「自分が選び、行動を起こした結果、何かが手に入った」という小さなコントロール感を得ることができるものである。この心理の変化は、日常生活で失われがちな自己決定感や達成感を補完してストレス解消につながると考えられているため、自然と回したいという気持ちが生まれるとされている。

最後に

このように、カプセルトイはたくさんの人に愛され続けている身近な存在である。日本に輸入された当時は子供向

けだったカプセルトイが、日本で独自の進化を遂げ、小さな子供から大人まで、そして全国的に広まっていった。この日本独自の文化であるカプセルトイがこれからの世代にも伝わり、末永く愛され続けるものであってほしい。

参考文献

- ・新しい日本文化「カプセルトイ」の世界〈<http://ihscacafe.ihcsa.or.jp/news/capsule/>〉
- ・1965年日本に上陸してからの「ガチャ」の歴史を公開！「タカラトミー」アーカイブス https://www.takaratomy-arts.co.jp/company/pdf/R_GachaDay2024.pdf
- ・ガチャガチャ回すカプセルトイ専門店増える（NHK）
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20250508/K10014799641000.html>
- ・ティードロ効果 <https://co-tanm.co.jp/web-marketing/psychology/diderot-effect/>
- ・なぜ今、大人女子がガチャガチャに夢中なのか？ 心理とマーケティングで読み解く「体験価値」のヒント <https://blog.brandbudyz.com/gacha>

〈寸評〉

担当教員：河合 泰弘

学問も趣味も、深い関心をもってとことん追究する点では共通する。このような意味で、趣味の世界も学問の世界に通ずるところがある。そこで、私の教養セミナーでは、「趣味から始める学問入門」をキヤッチフレーズに、各学生が自己の趣味や関心事の中からテーマを選

び、それをレポートにまとめ、さらにはその内容をプレゼンするという手順で授業を進めていった。

木村さんは、街中などで目にすることも多いカプセルトイに興味を持ち、その歴史や魅力についてまとめてくれた。要点が整理され、よくまとまっていると思う。授業では、このレポートをもとに口頭発表をもらったが、聴いていた学生にもよく理解できたと思う。日常の中に何気なくあるものも、突き詰めてゆけば、学問に通じるところがあることを、木村さんは証明してくれたと思う。益々の精進を期待する。

推薦したいもの

加藤 諒 平

(商学科一年)

私は聖地巡礼をすることを推薦したい。聖地巡礼とは、アニメや漫画、映画などの舞台になった場所を訪れることであり、ある作品に登場した場所をめぐることで、その作品の登場人物たちが見た景色や雰囲気をも自分の目で確かめることができる。近年では、聖地巡礼がファン活動の一部として広まり、地方観光の新しい形としても注目を集めている。

聖地巡礼と聞くと、多くの人は熱心なファンが行う一時的な趣味やオタク文化の一部といった印象を持つかもしれない。たしかに、作品をきっかけに訪れることが多いため、興味が無い人からすれば理解しにくいところもあるだろう。また、わざわざお金と時間をかけていく意味があるのかと考える人も少なくない。一般的には、聖地巡礼は観光や娯楽の延長線上にあるものとみなされがちである。

しかし、聖地巡礼には、そのような表面的な見方では理解できない、より深い魅力がある。それは、作品の世界を現実の空間の中で体験できるという点である。私たちは普段、アニメや映画の中の景色を画面越しの世界としてみて

いる。しかし、実際にその舞台を訪れることで、物語に登場した風景を五感で感じ取り、登場人物の感情や作品の雰囲気をもより深く理解することができる。作品で見たあの場所に自分が立っているという実感は、視聴者としての経験を超えて、まるで物語の一部になったような、2Dから3Dになった感覚を与えてくれるのである。

私自身が聖地巡礼の魅力に気づいたのは、新海誠監督の「言の葉の庭」という作品に登場する東京の新宿御苑を訪れた時である。映画の中では、主人公とある女性が雨の日に出会い、心を通わせていく象徴的な場所として描かれている。実際にその園庭を歩いた時、雨に濡れる植物（緑）の香りや、静かな空気の中で聞こえる水の音（雨音）が、映画を観たときに感じた切なさ重なった。まるで登場人物と同じ時間を過ごしているような感覚になり、作品で描かれた「孤独と癒し」というテーマが、より現実的で身近なものとして感じられた。

つまり、聖地巡礼の本当の魅力は単なる観光やファン活動ではなく、作品世界と現実世界をつなぐ体験的理解であるといえる。多くのファンがこの魅力に気づかないのは、作品を現実とは切り離されたフィクションとしてしか見ていないからではないだろうか。確かに、映像作品は、創造物である。しかし、実際に舞台にして作られている場合、その場所には作品がもつ空気感や物語性が存在している。そこを訪れることによって、私たちは、現実世界の中に物

語が存在しているという新しい視点を得ることができると。

また聖地巡礼は個人の感動体験と地域のつながりを生み出す文化活動でもある。作品をきっかけに多くの人がその土地を訪れることで、地域活動の活性化や観光促進にもつながっている。たとえば「言の葉の庭」の新宿御苑も、公開後には映画を見た多くの人が訪れ、作品を通して日本の庭園文化の美しさを再認識する機会となった。こうした動機は、アニメや映画が単なる娯楽にとどまらず、地域の文化資源を再発見するきっかけになることを示している。

このように、聖地巡礼は個人の感動と地域の文化が交わる場であり、人と場所、そして物語をつなぐ特別な行為である。聖地巡礼の本当の面白さを理解するためには、作品をただ観るだけでなく、自分の足でその舞台に立ち、感じ取ることが重要である。作品を通して場所を知り、その場で再び作品を思い出す。そうした往復の体験こそが、聖地巡礼の醍醐味であり、ほかのどんな観光や娯楽にもない価値を生み出す。

聖地巡礼の本質は、作品の世界と自分自身の現実をつなぐ感情の共有体験にある。それは、物語の登場人物の思いを追体験しながら、自分自身の感情を重ね合わせることもある。今後多くの人々が聖地巡礼を通じて作品を新しい角度から体験し、そこから地域や人とのつながりを感じることであれば、聖地巡礼は一時的な流行ではなく、文化としてさらに成熟していくと考えられる。聖地巡礼の真の魅

力は、物語と現実、そして人と人とを結びつける力にある。

〈寸評〉

担当教員…河野 敏宏

今年度の教養セミナーⅡでは三編の文章執筆練習を行った。ひとつは春学期に実施した「自画像」の執筆練習であり、あとふたつは秋学期に実施した「推薦したいもの」「外国人材の受け入れに賛成か反対か」というテーマによる執筆練習である。

加藤君の文章は「推薦したいもの」というテーマによる文章であり、「聖地巡礼」の魅力について述べている。聖地巡礼といえ、多くの人は「趣味やオタク文化の一部」ととらえがちであるが、加藤君は具体例をあげて、「作品世界と現実世界をつなぐ体験的理解」という、より深い作品理解の手立てだととらえている。また、聖地巡礼は、個人的体験にとどまらず、「地域活動の活性化や観光促進」にもつながる「文化活動」でもあると指摘している。具体例に基づいた文章は十分に説得力をもつものであり、聖地巡礼の本質に迫ろうとしたその結論は秀逸である。加藤君には、今後も、このような深い考察によってさまざまな事象を分析する力を身にかけていってほしい。

「伝える力 伝わる力」

小野寺 咲 星

(商学科一年)

私たちの日常生活では、会話や説明、プレゼンテーションなど、他者とコミュニケーションを取る場面が数多くある。大学生活においても、友人関係や授業、アルバイトなど、さまざまな場面で円滑な意思疎通が求められている。しかし、自分では「きちんと話したつもり」であっても、相手に正しく理解されていないと感じた経験は誰にでもあろう。友人との会話やアルバイト先での接客、授業内での発表などを振り返ってみても、意図とは異なる受け取られ方をしてしまった経験は決して少なくない。このような背景から、「伝える力」と「伝わる力」の違いを明確にし、相手により効果的に情報を届けるための具体的な方法について考察する。

まず、「伝える力」とは、話し手が情報を正確に発信する能力のことであり、「自分がどのように話すか」に重点が置かれる。一方で、「伝わる力」とは、相手がその情報をどのように受け取り、理解したかという点に焦点が当てられる概念である。つまり、どれほど論理的で丁寧な説明を行ったとしても、相手が理解できなければ、それは一方

的な情報発信に過ぎない。特に現代社会では情報量が多く、相手に配慮しない説明は印象に残りにくい。コミュニケーションが上手な人は、「話したかどうか」ではなく「理解されたかどうか」を基準に考え、受け手の反応を見ながら伝え方を調整している点が特徴である。

「伝わる」コミュニケーションを実現するための一つ目の方法として、「PREP法」が挙げられる。PREP法とは、結論(Point)↓理由(Reason)↓具体例(Example)↓結論(Point)の順で話を構成する手法である。最初に結論を提示することで、相手は話の全体像を把握しやすくなり、内容への理解が深まる。また、話の目的が明確になるため、聞き手の集中力を維持しやすい。その後理由と具体例を示すことで、主張に対する納得感が高まり、話の説得力が増す。この手法は、限られた時間で要点を伝える必要があるプレゼンテーションや説明の場面において、特に有効である。

二つ目のポイントは、「聴衆分析」、すなわち相手の立場に立って考えることである。話し手は「何を話すか」「どのように話すか」に意識が向きがちだが、「誰に話すか」を明確にすることが、伝わるコミュニケーションの前提となる。相手の年齢や知識量、関心の度合い、話を聞く目的などを想定することで、適切な言葉選びや説明の深さを調整できる。特に専門用語の使用には注意が必要であり、「相手が理解できる言葉で話す」という姿勢が重要で

ある。

三つ目は、「非言語コミュニケーション」の活用である。非言語コミュニケーションとは、表情、視線、声のトーン、ジェスチャーなど、言葉以外の要素によって感情や意図を伝える方法である。人は無意識のうちに相手の態度から多くの情報を受け取っている。心理学における「メラビアン」の法則」によれば、人が受け取る印象の多くは視覚情報や聴覚情報に左右されるとされている。このことから、話の内容だけでなく、話し方や態度も相手の理解や印象に大きく影響することが分かる。

これらに関連した具体例として、私自身がアルバイト先であるスターバックスコーヒーで経験した商品説明の事例が挙げられる。専門用語を多用し、表情や声の抑揚が乏しい説明では、相手は内容を十分に理解できず、結果として購買には至らなかった。このとき、相手の立場を十分に考えられていなかったと感じた。一方で、相手の好みに寄り添い、分かりやすい表現と明るい表情を意識した説明を行うことで、相手の理解と興味を引き出すことができた。この経験から、「伝える力」を工夫することが、相手の行動の変化につながることを実感した。

また、この「伝える力」と「伝わる力」は、商学部で学ぶマーケティングや販売、組織内コミュニケーションとも密接に関わっていると考えられる。企業活動においては、商品やサービスの価値を相手に正しく理解してもらうこと

が重要であり、そのためには単なる情報の提示ではなく、相手の立場や感情、理解度に配慮した伝え方が求められる。今回学んだ内容は、将来ビジネスの現場で顧客や取引先と関わる際にも、相手との信頼関係を築く上で大いに役立つだろう。

さらに、自分自身の話し方を客観的に見直す機会を意識的に持つことも重要である。相手の反応を観察し、その態度伝え方を調整する姿勢を持つことで、コミュニケーションは一方通行ではなく双方向のものになる。

以上のように、「伝える力」と「伝わる力」は、意識的な工夫と経験の積み重ねによって誰でも向上させることができるスキルである。学生のうちから日常生活や学習の場で実践を重ね、自身の課題や弱点を把握しながら改善していくことで、人の感情や理解度に配慮した「伝わる」コミュニケーションを身につけていきたいと思う。

〈寸評〉

担当教員・佐々木 真

この教養セミナーでは「伝える力、伝わる力」をテーマとして、春学期には「読む・書く」力、秋学期には「聞く・話す」力を育成する演習を重ねてきました。特に秋学期は各学生が個別発表、グループ発表と三回の口頭発表を課せられて、良い練習になったようです。

小野寺さんは「伝える力」は情報伝達力であり、「伝わる力」は意図した情報が理解されているかという受け

手に焦点を当てています。「伝える」ための情報構成、受け手の分析、また言語のみならず非言語との組み合わせが大切だと述べています。

コミュニケーションではお互いに同じ情報を共有していると考えて、自分の言葉を理解されるものだと考えてしまいますが、相手との背景も異なり自分の意図が必ずしも伝達されるわけではないという認識が必要でしょう。

「伝える力 伝わる力」

—SNSで正確な意思疎通はできるのか—

鈴木 悠

(商学科一年)

現代社会において、SNSは私たち大学生の生活に欠かせないコミュニケーションツールとなっている。特にLINEやInstagramのDMなど、一対一で手軽にやり取りできるサービスは、友人関係や学校生活、アルバイトなど、さまざまな場面で利用されている。しかし、その便利さの一方で、「自分の意図とは違う意味で受け取られてしまった」「冗談のつもりが相手を怒らせてしまった」といった経験をした人も少なくないのではないだろうか。本レポートでは、SNS、特にLINEやDMといった一対一のコミュニケーションに焦点を当て、SNS上で正確な意思疎通は可能なのかについて考察する。

結論から述べると、SNSにおいて全く誤解を生まずに意思疎通を行うことは不可能であると考える。しかし、それはSNSでのコミュニケーションが無意味であるということではない。誤解が生じやすいという特性を理解した上で、工夫を重ねることが重要である。本発表では、実際に私たちのグループメンバーが体験した具体的な例をもと

に、どのようなやり取りであればお互いにストレスなく、円滑なコミュニケーションが可能であったのかを検討した。

まず、LINEやDMではどのような問題が起こりやすいのかを整理する。代表的な問題として挙げられるのは、感情やニュアンスが正しく伝わらない点である。文字だけのやり取りでは、話し手の気持ちや温度感が伝わりにくく、意図とは異なる印象を与えてしまうことがある。例えば、絵文字だけで返信したところ、相手から「会話をする気がない」「適当にあしらわれている」と受け取られてしまったという例があった。また、誤字や「？」を付け忘れただけで、怒っていないにもかかわらず「不機嫌なのではないか」「責められているのではないか」と誤解されてしまうこともある。

これらの問題は、SNSという間接的なコミュニケーション手段の特性から生じていると考えられる。対面での会話では、私たちは言葉だけでなく、表情、声の大きさやトーン、ジェスチャー、視線、抑揚、さらには相手との物理的な距離感など、さまざまな非言語的情報を用いて意思疎通を行っている。これらの要素があることで、同じ言葉でも意味や感情を柔軟に伝えることができる。しかし、SNSでは顔を合わせる必要がなく、気軽にやり取りできる反面、これらの非言語的要素をほとんど用いることができず、そのため、限られた文字情報の中で、自分の気持ち

や意図を正確に表現する必要があるのである。

次に、実際の体験例をもとに、どのようなやり取りであればより良かったのかを考える。二つ目の例は、「短文すぎて冷たく感じられる」というものである。返信が「了解」「うん」などの一言だけだった場合、本人にそのつもりがなくても、相手には感情がこもっていない、適当に返事をしていると感じさせてしまうことがある。このような場合、「了解!」のように感嘆符を付けたり、簡単な絵文字を添えたりすることで、前向きな感情や柔らかい印象を伝えることができると考えられる。

二つ目の例は、冗談が伝わらない、または本気で言っていることが冗談として受け取られてしまうという問題である。SNSではテンションや抑揚が伝わらないため、文脈によっては真逆の意味で解釈されてしまうことがある。このような場合、「笑」「冗談だけど」などの補足を加えたり、絵文字を用いたりすることで、発言の意図を明確にする工夫が有効である。

三つ目は、「？」の付け忘れによって意味が真反対に受け取られてしまった例である。本来は質問のつもりで送った文章が、断定的な言い方として相手に伝わり、不快感を与えてしまった。このような小さな記号一つでも、受け取り方が大きく変わることがSNSの特徴である。

四つ目は、漢字の読み方の認識の違いによって、意図せず失礼な返信になってしまった例である。文字情報だけの

やり取りでは、読み手の解釈に委ねられる部分が大きく、こうした齟齬が生じやすい。

これらのトラブルは、友人や兄妹など、比較的親しい間柄で起こりやすいという共通点がある。一方で、先生や目上の人とのやり取りでは、同様の問題は比較的起こりにくい。その理由として、「社会的立場が対等であること」や「心理的距離が近いこと」が挙げられると考えられる。親しい関係であるがゆえに、「自分と相手の感覚は同じである」「これくらいなら伝わるだろう」と無意識に思い込んでしまい、表現を省略してしまうのである。しかし、実際には人それぞれ感じ方や受け取り方は異なるため、その思い込みが誤解を生む原因となる。

以上のことから、SNSで完全に誤解をなくすことは難しい。しかし、その特性を理解し相手の立場を意識した表現を心がけることで、誤解を減らすことは可能であると言える。文字だけのコミュニケーションだからこそ、感情や意図を補う工夫が必要であり、それが円滑な人間関係の維持につながると思われる。

SNSは今後も私たちの生活に欠かせないコミュニケーション手段であり、その利用頻度はさらに高まっていくと予想される。だからこそ、便利さだけに目を向けるのではなく、誤解が生じやすいという弱点を正しく理解することが重要である。特に親しい関係であっても、自分と相手の感じ方は必ずしも同じではないという意識を持ち、必要に

応じて言葉を補ったり、表現を丁寧にしたりする姿勢が求められる。

SNSでの意思疎通を完全に正確なものにすることはできないが、相手を思いやる工夫を重ねることで、すれ違いや無用なトラブルを減らすことは可能である。本論で述べたような具体例を意識しながらSNSを利用することが、より良い人間関係の構築につながるのではないだろうか。

〈寸評〉

担当教員・佐々木 真

この教養セミナーでは「伝える力、伝わる力」をテーマとして、春学期には「読む・書く」力、秋学期には「聞く・話す」力を育成する演習を重ねてきました。特に秋学期は各学生が個別発表、グループ発表と三回の口頭発表を課せられて、良い練習になったようです。

鈴木さんはSNSでの意思疎通では情報を補充する間接的な情報を付加できないために誤解を生ずる危険性が高いと述べています。さまざまな例を挙げながら問題を指摘しつつも、文字だけの意思疎通だからこその特徴を理解することで、不必要な誤解を避けられると結論づけています。今では当たり前のように利用されるSNSですが、必ずしも自分の意図されたようには解釈されず、時には炎上という問題する引き起こす可能性がありま

す。
対面のコミュニケーションでは、顔の表情はイント

ネーションによって、言語情報を補充することができず、文字やアイコンなどの視覚情報では時に情報不足となります。SNSで使うことができる情報の特性をよく理解した上で、上手にテクノロジーを利用するのも、現代のコミュニケーション能力の一つと言えるでしょう。

急増したクマの死骸の 処理について

兼松 楓 夏

(商学科一年)

全国のクマの駆除数が四〇十月末時点で九七六五頭となり、統計を始めた二〇〇六年度以降で最多となったことが環境省のまとめでわかった。生活圏への出没数の増加に伴って、市街地での「緊急銃猟」が始まったことなどが駆除数を急増させた原因として挙げられている。その中で、東北地方が六五七九頭で七割近くを占めた。これまで年間を通じて最も多かったのは二三年度の九〇九九頭であった。しかし、今年は半年余りでその最多を更新した。捕獲の現場では、死骸の処理が課題となっている。本レポートではクマの死骸の処理に対する取り組みについて記す。

駆除したクマは従来、解体して焼却施設で処理するか、穴を掘って埋めるが、ハンターへの負担も大きい。そこで、新たな処理方法を模索する自治体が出始めている。宮城県七ヶ宿町の「減容化施設」は、処理の需要が高まる中、焼却、埋却に並ぶ「第三の処理法」として近年、注目されている。長さ七メートル、高さ一・五メートルほどの箱形の設備で、箱の中では、おがくず中の微生物が有害鳥

獸を分解し、容積を小さくすることで処理している。本来はイノシシ用に設けるが、このようにクマ処理に使うことを許可しているところもある。七ヶ宿町は駆除した有害鳥獣の約九割を、減容化施設で処理している。例年十一月末には閉鎖するが、今年も処理が長引き、十二月中も稼働を続けた。施設を実際に管理するのは、町から鳥獣被害対策実施隊に任命されたハンターだ。かつては土中に埋めて処理してきたが、深く穴を掘る重労働は、多忙なハンターには大きな負担になっていた。焼却処理の場合も、一般廃棄物として処分するために解体の手間がかかる。埋却後も「においがする」と近隣住民から苦情が来たり、他の動物に掘り起こされたりと悩みは尽きなかった。そんな中で負担軽減の一手となったのが、この減容化処理だった。国も補助金を用意し、普及を進めるが、東北では青森、秋田、岩手、山形の四県が未導入だ。秋田県自然保護課によると、現場のハンターから減容化施設を求める声は多い。ただ、他県で目立つイノシシやシカの捕獲は秋田ではむしろ少ない事情もあり、有害鳥獣対策としては採算が合わず、踏み切れていないという。また、減容化施設は穴掘りや解体の負担減につながる一方、メンテナンスの負担は避けられない。ハンターらは装置内のスクリーナーとおがくずを毎日欠かさず点検し、分解に必要な水分が足りなければ補う。それでも、少なくとも（埋却後に発生する）においの問題が無くなったのは大きい。また町も、その場で埋める

より、施設に搬入してもらうことで、より確かな個体の把握につながっているとしている。

その一方で、思いも寄らぬ現象が在日中国社会の中で静かに広がりつつある。それが「熊掌（クマの手）」をめぐるブームだ。火付け役となったのは、料理を主に発信する日本在住の中国人女性ブロガーである。一連の調理過程を取めた彼女の動画は大きな反響を呼び、普段は数百回程度の再生数だった動画が、一気に一万回を超える再生数を記録した。また北海道の牧場で働く中国人男性は、より本格的にクマ肉を扱っている。中国東北部出身の彼は、二〇一八年に技能実習生として来日して以降、イノシシやシカなどのジビエ料理を好み、保存用に大型冷凍庫まで購入したという。牧場主の知人が地元の農協関係者で、日本ではクマ肉はほとんど食用にされず、捕獲後は焼却処分されることが多いと聞き、扱うようになったという。シェフとして働く中国人男性は、この背景を文化的観点から説明する。彼によると、中国では熊掌を食用とする歴史は非常に古く、先秦時代の文献にもすでにその記録が見られるという。儒家の重要な思想家であり、孔子の学説を継承した孟子は、「魚も欲しいが、熊掌も欲しい。二つを同時に得られないのであれば、魚を捨てて熊掌を取る」と記している。この言葉は、人生においてすべての良いものを同時に手に入れることはできないという道理を説いたものであると同時に、人々の間に「熊掌は魚よりも価値が高い」とい

う認識を定着させた。これは、当時すでに熊掌が珍味として位置付けられていたことを物語っている。その後の封建社会において、熊掌は宮廷の宴席や王侯貴族の饗宴に登場しており、ほかの食材と合わせて「上八珍^{※1}」と称された。

これは中国伝統の食文化における最高級食材の総称であり、熊掌は身分や権力、富の象徴として、一般庶民が口にすることはほとんどなかった。しかし時代が下り、一九八九年に中国で「野生動物保護法」が制定されると、貴重な野生動物資源を守るため、クマを含む野生動物の捕獲や食用は厳しく禁止された。人工飼育されたクマであっても、熊掌を食品として流通・消費することは認められておらず、違反者は罰金や拘留、さらには実刑を含む刑事責任を問われる可能性がある。近年、取り締まりは一層厳格化している。そのため多くの中国人にとって、熊掌は書物の中のみ存在する「伝説の料理」となった。こうした背景の下、中国の食文化史の中で数千年にわたり名声を誇ってきた熊掌は、中国本土ではすでに完全に姿を消した。ところが、二〇二五年に、クマの駆除件数が急増したことによって、日本で思わぬ形での「復活」を遂げることとなった。二〇二五年には、クマによる被害が過去最大となり、駆除件数も今までの最多記録を半年余りで更新する結果となった。駆除数の急増に伴い、処理し切れない「クマの死骸」が各地で問題化し、日本社会に新たな課題を突き付けている。これを解決するために、燃やしたり、埋めたりす

るのではなく、おがくず中の微生物の働きで分解し、容積を小さくする現用化収容施設の建設が検討されている。また主に在日中国人の間では現在、日本でのクマ被害の拡大を背景に、合法的な入手経路について知る在日中国人が増えた。そして、彼らの間に伝説とされてきた味を一度は確かめてみたいという思いが広がっている。こうした背景の下、在日中国人社会で「熊掌ブーム」が起きている。クマについて調べてみて、出没した話や、死傷者についての報道はよく見聞きしたが、その後の処理までフォーカスされた報道はあまり聞かなかつたように感じた。また、駆除して終わりではないという当たり前の事実に変更して気づかされた。中国では、可食部の多そうな胴あたりではなく熊掌を選んで食べるというところに食文化の多様性を感じた。

補足

※1 猩唇（しょうしん、オランウータンなど大型霊長類の唇）、駝峰（だほう、ラクダのこぶ）、猴頭（こうとう、サル頭の）、燕の巣（アナツバメが唾液で作る巣）、鳧脯（ふほ、野生のカモ類の干し肉）、鹿筋（ろくきん、シカの腱）、黄唇膠（こうしんこう、ニベ科大型魚類の浮き袋を乾燥させたもの）などと共に「上八珍」と称された。

参考文献

・「駆除のクマ『減容』施設フル稼働 微生物の働きで分解、焼却・埋却に並ぶ処理法」朝日新聞 二〇二五年一月二十九日朝

刊

・「日本で『クマの死骸』問題深刻化、在日中国人社会で『熊掌ブーム』広がる」レコードチャイナ

https://topics.smt.docomo.ne.jp/amp/article/recordchina/business/recordchina-RC_968205 (二〇二六年一月一九日 閲覧)

・クマに関する各種情報・取組 環境省

<https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/effort12.html> (二〇二六年一月一九日 閲覧)

〈寸評〉

担当教員・柴田 哲雄

教養セミナーⅠ・Ⅱでは「キャリアの基礎を固めよう！」をキャッチフレーズにしています。毎回の授業の前半では、就職活動の際に必要なとされる基礎学力のトレーニングを行い、授業の後半では、新聞の記事や論説を輪読して、受講生全員に発言してもらいました。期末には、基礎学力を問う定期試験だけでなく、「気になる時事問題」をテーマとするレポートも課しました。

兼松さんは一年間、教養セミナーⅠ・Ⅱの授業に欠かさず出席し、意欲的に取り組んできました。兼松さんは基礎学力が高いだけでなく、本レポートに見られるように、今年度話題になった熊出没の問題について、ユニークな視点から論理的に論じる力も身につけています。

兼松さんをはじめとする受講生全員が、二年生以降も引き続き基礎学力のトレーニングを積み、特に将来の進

路に関連する時事問題に対して関心を抱き続けるように希望するものです。

『ファウスト』(第一部・第二部)

を読んで

中 嶌 和 香

(心理学科一年)

『ファウスト』冒頭の「天上の序曲」で、主は、人間は暗い衝動に駆られながらも、「正しい道」を歩む可能性をもつ存在であると語っている。一方、悪魔メフィストは人間の営みを嘲笑し、人生には意味がないという考えを示している。人間の一生についての、この二つの対立する見方は、第一部から第二部まで続くファウストの物語全体を理解する上で重要な手がかりとなる。本レポートでは、この対立を手がかりに、「正しい道」とは何を意味するのかについて考察していきたい。

『ファウスト』を読み始めた当初、私は「正しい道」とは道徳的に正しい行為のことだと考えていた。他者を傷つけず、思いやりを持ち、弱い立場の人を守ること、不正や暴力を行わないことなどがそれに当たるだろう。このような価値観は、私たちが日常的に「正しい」と感じる行為とも一致している。しかし、ファウストの行動を振り返ると、彼はこうした道徳的基準から大きく逸脱している。第一部では、マルガレーテとの恋を通じて、彼女の母や兄を

死に追いやり、最終的にはマルガレーテ自身を破滅へと導いた。第二部においても、理想社会の建設を進める過程で、邪魔となった老夫婦ビレモンとパウチスを死に至らしめている。これらの行為を見れば、ファウストが「正しい道」を歩んでいるとは言い難い。

それにもかかわらず、ファウストは最終的に救済される。この事実は、作中で語られる「正しい道」が単純な道徳的善悪とは異なる基準で考えられていることを示している。もし、道徳的正しさのみが評価基準であるならば、彼の救済は説明できない。では、ファウストの何が評価されたのだろうか。

その手がかりは、第一部と第二部におけるファウストの欲望の質の変化にあると考えられる。第一部のファウストは、知の探究や若さの獲得など、自分が満たされたいといった自己中心的な欲望に突き動かされていた。彼の行動は他者のためではなく、自分の満足や虚しさを埋めるためのものであり、その結果として他者の人生を顧みないものとなっていた。一方、第二部では、人々が自由に生きられる社会を築こうとするなど、欲望の内容が個人のレベルを超え、社会全体を対象とするものへと向かっていく。この変化は、単なる行動の違いではなく、彼の生き方そのものの変化を表していると考えられる。

作品の結末におけるファウストの救済は、グレートヒエン(マルガレーテ)の愛や祈り、神の恩寵やファウスト自

身の不断の努力によってもたらされている。ここでいう努力というものは、単に頑張り続ければよいということではない。若返りからのファウストの試みは、失敗に終わった、多くの犠牲を生んだりしている。つまり、成功したかどうか、犠牲や被害を出さなかったかどうかといった、結果そのものが判断基準ではないということだ。重要なのは、欲望が自己のためだけでなく、他者や社会をより良くしようとする方向へ向かっていった点である。その常により良いものを目指し、追求し続ける姿勢にこそ、最終的にファウストが救済された根拠があると考えられる。

これに対し、メフィストは人間の努力を無意味なものに見なし、欲望には終わりがなく、人間は失敗を繰り返すのみだと考えている。その考え方には理解できる部分もある。人間はいずれ死を迎える存在であり、限りのある一生において完全に満足することは難しいと思われるからだ。しかし、それでも人生が無意味だとは言えない。ファウストは多くの過ちを犯しながらも、立ち止まることなく、人間にとって最も美しいもの、人生において最高に満足できる瞬間を追求し続け、歩み続けた。そのような彼の人生の過程そのものに意味があったのではないだろうか。人生の価値は、完全な成功や正解を手にするところにあるのではなく、より良いものを目指して進み、挑み続ける姿勢の中にこそ見出されるのである。

以上を踏まえると、『ファウスト』における「正しい

道」とは、道徳的に非の打ちどころのない行為を積み重ねることではない。それは、自己中心的な欲望にとどまらず、他者や社会のことも視野に入れて生きようとする、人生のベクトルを指しているのだと考えられる。ファウストの人生は多くの過ちに満ちているが、それでもなお前に進み続けた点にこそ、この作品の示す「正しい道」があるのではないだろうか。

テキスト

ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ著『ファウスト』（第一部・第二部）、池内紀訳、集英社文庫、二〇〇四年

注

(1) 『ファウスト』（第一部）二五―二六頁

主がメフィストに語る言葉に、「良い人間は暗い衝動に駆られても、正しい道をそれなりに行くものだ」と、ぼやきにこないかな」とある。

〈寸評〉

担当教員・糸井川 修

この授業では一年をかけてドイツの文豪ゲーテの戯曲『ファウスト』を講読しています（春学期は第一部、秋学期は第二部）。そして学生の皆さんは、毎回授業の際に読み進んだ分の感想を提出し、学期末にそれをまとめたいレポートを作成します。

中寫さんのレポートは、限られた字数の中、主が語つ

た「正しい道」を手掛かりにして、分かりやすい構成で『ファウスト』の解釈を試みています。中寫さんが導き出した結論、すなわち、ここでいう「正しい道」とは、利己主義に陥らず、他者や社会に目を向ける生き方であり、より良い社会の構築に向けて挑戦し続ける生き方であるというのは、まさしくゲーテが『ファウスト』を通じて私達に送ろうとしたメッセージだと思います。心理学を専攻する皆さんが、このメッセージを受け止めて、教養と専門の知識を深め、将来社会で活躍されることを願っています。

『ファウスト』(第一部・第二部) を読んで

寺田悠乃

(心理学科一年)

『ファウスト』(第一部・第二部)を読んだことは、私たちの人生とは何なのかを、より深く考えるきっかけとなった。そして本作を最後まで読み終え、人間は完成された存在ではなく、過ちを重ねながらも前へ進もうとする姿勢によって価値づけられるのだ、という考えを強くした。

第一部におけるファウストは、学問を究め尽くしながらも追い求めていた真理に到達できず、悪魔であるメフィストフェレスと契約してまで欲望を満たそうとした。この契約は墮落の始まりとして描かれる一方で、ファウストを再び人間の世界へと引き戻す行為でもあった。そしてマルガレーテ(グレートヒエン)との出会いは、ファウストに最初の重大な結果をもたらした。二人の間には純粹な愛の喜びがあったが、彼女とその家族を破滅へと導いてしまう悲劇が伴った。ファウストは彼女の前から逃避し、責任から目を背ける場面もあって、決して気持ちのよい終わり方はなかった。しかし、この未熟さこそが、彼の人間の成長の出発点であったように思う。彼は自らの行動が他者の人

生を大きく左右することを、この悲劇を通して痛感したのであり、そこには思索だけでは決して得られない経験の重みを見出すことができる。

第二部では、物語の舞台が個人的な恋愛悲劇から、社会や歴史、文明全体へと広がる。ここでファウストは人間的な成長を遂げていく。海辺に干拓地を築くという事業は、ファウストが自然の傲慢さに苛立ちを感じるところから始まるが、彼の行動の次元がそれまでの個人的な欲望の充足から社会貢献というレベルへと変化していることが分かる。その干拓地は晩年に至ってもなお完成には至らず、ファウストは目も見えなくなっているが、「自由な土地を自由な人々とともに踏みしめ」（第二部四〇七頁）る未来を夢見る。その瞬間、彼は「時よ、とどまれ、おまえはじつに美しいと、呼びかけてやる」（同頁）と口にした。それは現状に満足して立ち止まるのではなく、努力を積み重ねた末に一瞬だけ見えた未来をつかもうとして放たれた声ではないかと思われる。そして最後に、彼は天使たちによつて導かれ、聖母マリアの許に救済される。

ファウストは決して善人と言える人物ではない。自分勝手に自身の欲望を満たしていったことにより、多くの罪を犯し、他者を犠牲にしてきた。それなのに、なぜ天のゆるしを得られたのだろうか。彼は一貫して立ち止まることなく、迷い、過ちを犯しながらも行動し続けた。私は、その生きる姿勢こそが、最終的に彼が救済へと導かれた理由で

あると考える。

また、この作品では、メフィストフェレスが大きな役割を担っている。彼は、ファウストを墮落に導く悪魔であると同時に、一歩引いて人間の矛盾や弱さを冷徹に暴く批評家でもある。ファウストの死に際、メフィストフェレスは、命に終わりのある人間のなすこと、人間の存在を無意味だと一蹴する発言をしている。これは悪魔の価値観を端的に表す言葉だ。しかし、ゲーテはそれを否定も肯定もしないで幕を閉じている。このことは、人生の意味は自分で決めるものであり、他人に評価されるものではないことを示しているように思う。

知識の渴望から始まり、愛と悲劇、罪と救済、そして人間の存在意義を探求する『ファウスト』は、完成された理想的人間像を描いた戯曲ではない。むしろ不完全で、矛盾を抱え、失敗を重ねる未熟な人間が、それでも行動し続けることの尊さを描いている。人生において私たちは、いくつもの出会いと別れ、成功と失敗を経験するだろう。しかし、これらすべては、行動を起こさなければ得られないものだ。ゲーテはファウストの人生を通して、「行動することそのものが生きることなのだ」というメッセージを、時代を超えて私たちに投げかけている。ファウストのように若返ったり、メフィストフェレスの力を借りたりはできないが、私もこれからの人生において、失敗を恐れずに行動するということを重要視していきたい。

テキスト

ヨハーン・ヴォルフガング・ゲーテ著『ファウスト』(第一部・

第二部)、池内紀訳、集英社文庫、二〇〇四年

〈寸評〉

担当教員・糸井川 修

この授業では一年をかけてドイツの文豪ゲーテの戯曲『ファウスト』を講読しています(春学期は第一部、秋学期は第二部)。そして学生の皆さんは、毎回授業の際に読み進んだ分の感想を提出し、学期末にそれをまとめたレポートを作成します。

寺田さんのレポートは、主人公ファウストが、過ちを重ねながらも行動し続けたことに注目して書かれています。授業でも紹介しましたが、ゲーテの作品には「生きているあいだ、何事も先へのぼすな。きみの生は、行為また行為であれ」(登張正實訳)という言葉もあります。作家であり、政治家でもあったゲーテは、生涯人々のために行動し、挑戦し続けました。彼の作品も人生も、自分の掲げた目標に向かって、安易に諦めや怠惰に陥ってはならないことを教えてくれています。寺田さんが書いているように、「行動することそのものが生きることなのだ」というゲーテからのメッセージを、学生の皆さんが心に留め、有意義な学生生活を送られることを願っています。

柳原通商店街の活性化

河口祥太

(経済学科一年)

一、現状と課題

本稿では、名古屋市北区に位置する「柳原通商店街」の現状を分析し、将来に向けた活性化について考えていく。

柳原通商店街振興組合・神田理事長の講演にて、柳原通商店街の現状について伺った。かつては商業地として、生活必需品から娯楽までが集まる非常に活気のある場所だったという。しかし、自動車が増え、社会に広く普及し人々の日常生活に不可欠なものになったことや地下鉄の普及により人が流出したことに加えて、店主の高齢化、後継者不足といった問題に直面している。

特に深刻な課題として挙げられたのは、商店街の「空き店舗の増加」と「通行量の減少」である。シャッターが閉まったままの店舗が目立ち始めると、通り全体の明るさが失われ、防犯上の懸念やさらなる客離れを招くという悪循環に陥っていることが挙げられた。

二、どのような地域か

商店街が直面する課題を客観的に把握するため、地域分

析ツールを用いて柳原通商店街周辺の分析を行った。

(1)人口動態の分析

統計ダッシュボード^①でデータを確認すると、北区全体として少子高齢化が進んでいることが分かる。特に柳原周辺は、名古屋市内の他の区と比較しても、六五歳以上の老年人口の割合が二八％（二〇二〇年）と高く、二〇代から四〇代の現役世代の流出、あるいは定着の不足が読み取れる。人口ピラミッドは「つぼ型」に近い形を示しており、将来は市場規模の縮小が懸念される。

(2)産業と流動人口の分析

RESAS^②の「滞留人口メッシュ分析」を用いると、商店街周辺の人の動きが可視化される。平日の日は近隣の住民による歩行が中心であるが、休日にかけて近隣の名城公園や名古屋城への観光客の流入があるものが分かる。柳原通商店街まで十分に引き込まれないことが分かる。近隣に大きな集客スポットがあるにもかかわらず、商店街はあくまで地域住民の生活道路としての機能に留まっており、外部からの流入を消費に繋がられていない。

(3)地域特性の分析

JSTAT MAP^③を用いて、商店街から徒歩一五分圏内の世帯特性を分析したところ、单身世帯の割合が比較的高いことが判明した。これは、近隣に大学のキャンパスがあることや、都心に近い利便性から若年層の単身者が一定数居住していることを示唆している。しかし、これらの層が商店

街を利用してしている形跡は薄く、ターゲットとサービスのミスマッチが起きている可能性が高い。

三、現在どのような取り組みをしているのか

フィールドワークや講演を通じて、現在の柳原通商店街で行われている取り組みを調査した。

まず目にしたのは「柳原夏祭り」などの伝統的なイベントである。これらは長年、地域住民の楽しみとして定着しており、開催時には多くの子供たちや高齢者が集まる。こうした「顔の見える関係性」が維持されている点は、大規模モールにはない商店街の強みである。夏祭りの際には、近隣の大学生と交流しながら開催されている。また、祭りだけでなくハロウィンの際にはスタンプラリーが開催され、飲食店では学割をきかせ、IGアリーナでのイベント開催時にはそれにちなんだメニューを作るなどといった取り組みが行われている。

しかし、これらの取り組みは運営側の高齢化という深刻な問題に直面している。伝統的な祭りや新しいイベントを企画、運営する人材が不足しており、このままでは数年後に活動が縮小してしまうリスクが考えられる。若年層に柳原通商店街のことに興味を持ってもらうことが必要である。

四、今後どのような活動が考えられるか

以上の現状と分析を踏まえて、柳原通商店街の活性化に向けた三つの提案を行う。

(1) 学生の力を活用した「アンテナショップ兼コミュニティースペース」の設置

JSTAJ MAPの分析で判明した通り、周辺には学生が多く居住している。一方で学生と商店街の接点は、夏祭り時にしかないと考えられる。そこで、大学と連携し、学生が運営に携わるアンテナショップを設置することを提案する。

地域事例として、東京都板橋区の高島平団地では、大学が商店街の空き店舗を借り受けて「コミュニティカフェ」を運営し、多世代の交流拠点となっている事例がある。柳原通商店街においても、学生の斬新なアイデアで地域の特産品を販売したり、高齢者向けのスマホ教室を店内で開催したりすることで、多世代が日常的に集まる仕組みを作ることができる。

(2) 名城公園からの「観光動線」の強化

RESASの分析で浮き彫りになった「近隣の観光客を呼び込めない」という課題に対し、名城公園から商店街への「食べ歩き散策コース」を提案する。

具体的には、商店街の各店舗が「ワンハンドフード」を開発し、共通のロゴを掲げる。名古屋城を訪れた観光客が「もう一歩足を伸ばしたくなる場所」として、レトロな街

並みを背景にしたフォトスポットを設置する。岐阜県高山市の古い町並みでは、地場産の牛串や寿司を提供することで、若年層の滞留時間を飛躍的に伸ばした実績がある。柳原通商店街も「昭和レトロな雰囲気」という既存の資産を活かせば、他の商店街との十分な差別化が可能である。

(3) シャッターアートによる「視覚的動線」の構築

フィールドワークで柳原通商店街を観察した結果、シャッターが閉まっているという課題が見られた。シャッターを「負の遺産」ではなく「観光資産」へと転換するため、シャッターアートの導入を提案する。

具体的には、単なる絵画ではなく上述した「ワンハンドフード」を手にもって撮影すると絵が完成するような「参加型フォトスポット」としてデザインする。神奈川県横浜市の「黄金町エリア」では、高架下の区間をアート拠点へと転換し、若年層の流入を劇的に増やした実績がある。名城公園から流れてきた観光客が、次々に出現するアートを追いかけて商店街の奥まで自然に歩き進むことが期待できる。

五、結論

柳原通商店街の活性化には、単なる物販の復興だけでなく、「学生、若者」という新しい風を入れ、近隣の「観光資源」と接続することが不可欠である。これにより、既存の地域住民を対象とした内需型経済から、広域観光客や若

年層を巻き込んだ外需獲得型へとアップデートを図る。データ分析が示す高齢者の現状を「高齢者にとつての利便性」と「若者にとつての実現の場」が共存する「多世代が支え合う魅力」へ転換することで、周辺エリアの価値の向上に貢献し、結果として「この町に住みたい」という居住満足度が底上げされる。柳原通商店街は都市部の持続可能な商店街のモデルとなり得る。

注

- (1) 総務省統計局ホームページ「統計ダッシュボード」<https://dashboard.e-stat.go.jp>
- (2) 内閣府・経済産業省ホームページ「RESAS 地域経済分析システム」<https://resas.go.jp>
- (3) 総務省統計局ホームページ「JSTAT MAP」<https://jstatmap.e-stat.go.jp/map.html>
- (4) 国土交通省(二〇一三)事例13「団地の空き家・空き店舗を活用した学生ボランティアらによる地域活性化」多世代交流と多文化共生の組み合わせ〜東京都板橋区高島平団地 <https://www.mlit.go.jp/common/000116035.pdf> (二〇一六年二月五日最終閲覧)

〈寸評〉

担当教員…中村 洋介

教養セミナーIIでは、プレゼンやレポートなどのアカデミックスキルを学ぶ過程で、名古屋市北区の柳原通商店街の活性化をテーマにした。授業では、商店街が抱える課題や周辺地域の変化を取り上げ、柳原商店街の魅力

を受講者の間で考える機会を設けた。その検討の前に、柳原通商店街でフィールドワークを行い、公的機関のウェブGISを活用した地域分析を体験した。

河口さんは、地域の人口の状況や人の動きを丁寧に分析し、商店街の方の話にも耳を傾けながら、柳原通商店街のもつ魅力と地域の特徴をもとに提案をすることができた。人流が減ってしまった商店街ではあるが、河口さんの論考では、商店街の周辺には人が集まる観光地が存在することに注目している。その「動線」を商店街に導こうとすることが核心である。商店街への「動線」を主軸とし、他地域の事例をもとに三つの提案を行った。三つのうちの二つは、どちらも楽しく街歩きができそうな内容である。もう一つでは、地域内の交流の活性化も忘れていない。国内の商店街の活性化にはその他の多くの成功事例があるだろう。地域のもつ特徴をふまえながら事例を今後も追究し、身近な地域の課題の解決に向けて行動してほしい。

柳原通商店街の現状、取り組み、活性化について

和田 倅 奈

(経済学科一年)

一、はじめに

本レポートは、愛知学院大学名城公園キャンパスの近隣に位置する柳原通商店街を対象にして、その課題や問題を取り上げ、現在の取り組みを踏まえながら、今後の柳原通り商店街の活性化について考察する。近年、大型ショッピングセンターやインターネット通販の普及によって商店街は厳しい状況に置かれている。柳原通商店街が現代で生き残るためにはどうすればよいのか考える。

二、どのような現状か、課題や問題は何か

柳原通商店街は、振興組合の登録が「日本で二番目に古い商店街」として長きにわたり地域住民の生活を支えてきた歴史がある。しかし、近年は来街者の減少と商店街の活気の低下が顕著である。問題点の一つに来街者、利用者の高齢化があげられる。主な利用客層が高齢者に偏っており、若者や子育て世代の利用が限定的である。このことから将来商店街の利用者の減少が懸念される。また、フイー

ルドワークで現在の柳原通商店街を観察したところ、空き店舗や駐車場が目立っていた。空き店舗は商店街の連結を損ない、来街者にとって魅力を感じにくい要因にもなる。

さらに、大型ショッピングセンターやインターネット通販との競争が激しくなっている点も課題である。価格や利便性の面で、個人営業者は独創性がなければ生き残りが難しい状況にある。また、大型施設に比べると情報の発信力が足りないのも問題である。来街者の減少は売上の低下を招き、それによって後継者不足や廃業につながるという悪循環を生み出している。商店街の店舗数が減少することで、来街者にとつての利便性や回遊性が低下し、結果としてさらに人が訪れなくなるという構造的な問題も抱えている。このように、柳原通商店街の課題は単独ではなく、複数の要因が連鎖的に影響し合っている点に特徴がある。

三、どのような地域か

柳原通商店街は名古屋市北区に位置する商店街である。「統計タツシュボード¹⁾」で二〇二〇年の名古屋市の人口を見ると、人口は増加しているが、高齢化も進んでいる。「地域経済分析システム RESAS²⁾」の地域人口メッシュ分析で柳原通商店街とその周辺地域を見ると、人口の減少が見られる。

柳原通商店街の周りには住宅街が広がっているため、飲食店や食肉・鮮魚店などの日常生活に役立つような店舗が

ある。ここでは長年営業を続ける老舗店舗が多くあり、地域住民の間には信頼関係が築かれている。大型施設と比べて顔なじみの関係があるのが商店街独自の強みである。このように、柳原通商店街は地域密着型という強みを持つ一方で、地域周辺は人口が減少しているため利用者を外部から引き寄せることが課題である。

四、現在行われている取り組み

柳原通商店街では、地域とのつながりを維持するため、様々な取り組みが行われている。例えば、夏祭りと冬祭り、ハロウィンのスタンプリー、名古屋造形大学や愛知学院大学との協同の地域行事や季節ごとのイベントを通じて、地域住民が商店街に足を運ぶ機会を増やしている。商店街として地域との協力関係を保ち、商店街が地元住民にとって身近な存在であり続けることを重視している。

また、地域の歴史に由来する「御土居下同心」の物語を地元住民と観光客が共に創る没入型演劇の「エンタビ(R)」³が始まっている。さらに、柳原通り商店街では、地域住民や来街者に向けた情報発信を強化するため公式インスタグラムなどのSNS (Social Networking Service) を積極的に運用している。ここでは、商店街の最新のイベントや出店情報などが定期的に発信されており、商店街全体の魅力を伝えている。公式SNSによる発信は、商店街全体としてのブランディングやイベント情報の伝達だけでなく、

各店舗・出店者の個性や魅力を来街者に伝える役割も果たしている。SNSの活用は地域外への情報発信手段として重要性が高まっていることから、今後も投稿内容の充実が期待される。特にSNSによる情報発信は、従来の紙媒体による広報と異なり、即時性と拡散性を兼ね備えている点の特徴である。イベント当日の様子や準備段階の投稿は、商店街の雰囲気視覚的に伝える効果があり、初めて訪れる人に対する心理的ハードルを下げる役割も果たしている。

五、今後期待される活性化の方向性

今後の柳原通商店街の活性化に向けては、既存の地域密着型という強みを活かしつつ、新たな来街者層を取り込む施策が望まれる。特にSNSを活用した情報発信の強化により、店舗の魅力や日常の風景、イベント情報を発信することが有効であると考えられる。また、空き店舗を活用した若者向け店舗やチャレンジショップの導入により、新たな担い手を育成することも期待される。大学生や若手事業者と連携した期間限定店舗の展開は、商店街に新しい風をもたらす可能性がある。若者向け施策を進める際には、既存の常連客との共存も重要な視点である。新規店舗やイベントが増えることで商店街の雰囲気が大きく変化しすぎると、従来の利用者が離れてしまう可能性もある。そのため、世代間の交流を促すような企画や、既存店舗と新規店

舗が協力する仕組みづくりが求められる。このような調整を行うことで、商店街全体として持続的な発展が可能になると考えられる。

さらに、地域住民や学校、自治体と連携したイベントの実施により、商店街を交流の場として再定義することも重要である。街並みの整備や看板デザインの統一など、視覚的な改善を行うことで、商店街全体の印象向上も見込まれる。これらの取り組みを段階的に進めることで、柳原通商店街は「生活の場」としての役割に加え、「訪れる価値のある場」として再評価され、持続的な活性化につながると思われる。また、二〇二五年には柳原通商店街の近隣にI Gアリーナが建設されたことにより、イベントの間に観客が訪れることも今後の商店街の活性化につながるだろう。

注

- (1) 総務省統計局ホームページ「統計ダッシュボード」<https://dashboard.e-stat.go.jp>
- (2) 内閣府・経済産業省ホームページ「地域経済分析システム RESAS」<https://resas.go.jp>
- (3) 産経新聞(二〇二五)「地域住民と交流した観光客の再訪率は約1.7倍 名古屋・柳原通商店街に伝わる“御土居下人”の物語を地元住民が演じる没入型演劇『エンタビ(R)』始動」
<https://www.sankei.com/pressrelease/prtimes/CNN2MBX4KBP1ONVW7GM73W54/> (二〇二五年十一月二六日配信)

〈寸評〉

担当教員・中村 洋介

教養セミナーIIでは、プレゼンやレポートなどのアカデミックスキルを学ぶ過程で、名古屋市北区の柳原通商店街の活性化をテーマにした。

和田さんは、フィールドワークと地域分析で得られた結果をもとに、商店街の一般的な現状と柳原通商店街がもつ課題を整理し、活性化への提案を考察することができた。柳原通商店街では、様々な課題がある中、積極的に課題解決に取り組んでいる。和田さんの論考では、柳原通商店街に「顔なじみの関係がある」という強みを見抜き、「地域密着型」と表現している。商店街の現在の取り組みにも注意深く目を向け、後半では柳原通商店街がもつ潜在性にも目を向けながら、商店街を再評価しようとして提案している。大学生の視点でもっと自由に大胆に提案することもできるが、自ら見聞きした材料をもとに、地域を大事にする商店街の特長もふまえながら、地域を応援する姿勢が読み取れた。今後も身近な地域の課題に目を向け、課題解決に向けて行動してほしいと期待している。

令和七年度 教養セミナー・テーマ一覧

教養セミナーⅠ・Ⅱ

文学部

教員名	テーマ
青山 健太	大学での学びのスタート！ 知識や技術を活用しよう！
浅原 正和	本を起点に知識の源流を探る旅に出よう
池田 健	科学を楽しもう
岩佐 宣明	論理トレーニング—ものごとを正確に表現する力を身につけよう—
遠藤 哲也	自分で物事を考えられる、自立した大人になろう
河合 泰弘	趣味から始める学問入門
小柳 竜太	技術としての教養を身につける
境田 雅章	サッカーを通してスポーツの社会を考える
中村 綾	日本と中国の文化をテーマに表現力を身に付けよう！
R・L・ンテスタイン	ハリウッド映画と音楽で1960年代の文化を紹介する
野田 大志	適切で効果的な日本語コミュニケーションを目指そう！
藤田 淳志	アメリカのニュースやヒットソングを通して広い視野を身につけよう
松井 真一	「社会」の見方・測り方—社会を題材に論理的思考を身につけよう—
三上 綾介	効果的な外国語学習法の最前線—最新の知見を批判的に考える—
文 嬉眞	異文化・自国文化を考えよう！

山口 拓史	学び続けるチカラ
山下 秀康	プログラミング入門
H・ドイロン	Active Reading

経営学部

教員名	テーマ
有馬 義康	目指せ！ プレゼンの達人！！
糸井川 修	「ファウスト」を読む
勝股 高志	現代中国を知る
北村 伊都子	生活習慣と健康について考えよう
城 貞晴	四季の星空さんぽ
菅原 研州	ピリオオバトルを通して読書を好きになろう！
清 忠師	暮らしの中の科学
早川 真理子	英語のニュースや映画に触れてみよう！
南 裕明	数学の営み
鷲嶽 正道	アイデアを表現しよう！

法学部

教員名	テ ー マ
石川 一久	英語の歴史(イギリスにおける民族支配の影響を受けて)日常生活には科学がいっぱい! 理解して、より便利な生活を!
上原 宏行	趣味から始める学問入門
河合 泰弘	英語のふしぎ
澤田 真由美	キャリアの基礎を固めよう!
柴田 哲雄	コミュニケーション能力を鍛えて、夢をつかもう!
高田 正義	法的思考のすすめ
田中 淳子	量で物事を考える―ある「なし」だけじゃないモノの見方のトレーニング―
松永 諭	I、伝わる文章の書き方
山名 賢治	II、問題解決力を身につけよう
G・D・ガニエ	比較文化と実用英語

商学部

教員名	テ ー マ
相澤 秀生	「宗教の今」を新聞・雑誌から読み解く
河野 敏宏	日本語の文章表現力を身につけよう!
近藤 浩	読ませる文章を書けるようになる!
佐々木 真	伝える力 伝わる力
柴田 哲雄	キャリアの基礎を固めよう!
白木 優馬	大学生生活を一緒にはじめよう!

菅原 研州	ビブリオバトルを通して読書を好きになろう!
虎澤 慶太	論理的思考を鍛えよう

心理学部

教員名	テ ー マ
糸井川 修	『ファウスト』を読む
内田 康弘	学校の「当たり前」を見つめ直そう!―データから読み解く日本の教育―
小出 龍郎	I、『脳と心』のサイエンス II、『生(いのち)と死』のサイエンス
白木 優馬	大学生生活を一緒にはじめよう!
松井 真一	「社会」の見方・測り方―社会を題材に論理的思考を身につけよう―
水上 茜	科学的に正しいとは何か? を身につけよう

経済学部

教員名	テ ー マ
岩田 荘平	筋道だった思考と説得力のある叙述のために―初歩から学ぶ論理学―
川口 勇作	英語教育・学習について批判的に考える
久馬 栄道	超難解折り紙で、論理脳を鍛えよう
菅井 大地	文学を通して環境について考えよう
中村 洋介	地域の宝は何か、そのテーマに基づく作業を通じて、基本的な探究スキルを学ぶ
菅田 百合絵	スペイン文学を味わう

三輪 恭子	アメリカ文学を通して社会問題や女性の生き方に注目する
吉村 正宏	科学的な思考のレッスン

教養セミナーⅢ

教員名	テ	ー	マ
上原 宏行	数的推理の問題を通して論理的な考え方を養う		
糸井川 修	ドイツ語で読む『白雪姫』		
海野 勇三	現代における子どもの人権状況		
齋藤 和佳子	「ボンジョルノ！イタリア」―文化と会話を楽しもう―		
高田 正義	メンタルトレーニングの土台を作ろう		
文 嬉眞	異文化・自国文化を考えよう！		
山名 賢治	環境・エネルギー問題について考える		
山森 忠直	プロ棋士に学ぶ囲碁の基本―囲碁を通して「思考力」「判断力」「分析力」「集中力」を養う		

教養セミナーⅣ

教員名	テ	ー	マ
上原 宏行	数的処理の問題を通して論理的な考え方を養う		
糸井川 修	ドイツ語で読む『いばら姫』と『ラプンツェル』		
齋藤 和佳子	「ボンジョルノ！イタリア」―文化と会話を楽しもう―		
高田 正義	メンタルトレーニングを展開します		
文 嬉眞	異文化・自国文化を考えよう！		

表紙絵の思い出

—横浜赤レンガ倉庫—

教養部数学教室 久馬 栄道

去年の夏、私は横浜に二日連続でコンサートに行ったのですが、膝を負傷していて不安がありました。そこでネットで調べていたら、私の元教え子も同じコンサートに行く可能性があることがわかりました。連絡をとってみると夫婦でコンサートに行くということ、夫婦で私をサポートしてくれるという、誠にありがたい申し出がありました。

当日は新横浜の新幹線のプラットフォームで合流し、ホテルで休んでからみんなでコンサートへ、その後は皆で楽しく食事をしました。

次の日は別の元教え子も合流して、横浜の中華街でランチをして、その後はコンサートの二日目に行きました。

こういうのが教師をしていて良かったなあ、と思う瞬間ですが、私は本当に幸せ者だと思いました。

次の日は、近くの横浜赤レンガ倉庫に行ってスケッチしました。本当に良い旅行になりました。みんなありがとうね。

編集後記

『知の旅立ち』第30号をお届けいたします。今号は二十三編の原稿を掲載することができました。レポートを作成・投稿してくださった学生の皆さん、およびレポート作成において助言等尽力いただいたアドバイザーの先生方にはこの場を借りて深く御礼申し上げます。

本誌に掲載されているレポートは、すべて教養セミナーの授業において学生自身が作成したものになります。教養セミナーは、単に文章作成の技術を学ぶ場ではありません。自ら問いを立て、資料を読み、思索を深め、他者に伝える形で論を構築する、そうした「考える」という営みそのものを身につけることを目的としています。

一年生が大学に入学して間もない段階から試行錯誤を重ね、一年でここまでの文章を書き上げることができるという事実には、驚かされます。本誌で取り上げている文章には真摯な問いと瑞々しい視点があり、その一つ一つに成長の軌跡を見ることができます。

近年、生成AIの発達により、文章作成のあり方も大きく変わろうとしています。一方で、安易な利用やコピーペの問題も取り沙汰されています。本誌に掲載された原稿が示しているのは、時間をかけて自分の言葉で考え抜くことの尊さです。便利な道具があつたとしても、自分自身の思考を他者に委ねてしまつては、本当の意味での学びにはなりません。学生諸君には、ぜひ自分らしさを大切に、自らの言葉で世界と向き合い続けてほしいと願っています。

(水上記)

令和8年3月25日 印刷
令和8年3月30日 発行
(非売品)

愛知学院大学

『知の旅立ち』 教養セミナー学生論集

第30号
発行者

教養教育研究会

編集委員

河野敏宏
小柳竜太
松井真一
三輪恭子
誉田百合絵
水上茜

発行 愛知学院大学教養部 教養教育研究会

〒470-0195

愛知県日進市岩崎町阿良池12

電話〈0561〉(73) 1111

印刷所 株式会社 あるむ

名古屋市中区千代田3-1-12

電話〈052〉332-0861



AICHI GAKUIN
UNIVERSITY